

多賀城市内の遺跡 2

— 平成17年度発掘調査報告書 —

平成18年3月

多賀城市教育委員会

序 文

古代に東北支配の拠点として設置された「多賀城」を市名とする本市は、活力とふれあいのあるまち「史都 多賀城」を将来の都市像として掲げ、快適で豊かなまちづくりを推進しています。このためには、郷土の貴重な遺産である文化財の保護や後世への継承に積極的に取り組むとともに、都市計画との協調・融合を計りながら共生することが重要であると考えております。

さて本書は、平成17年度に国庫補助事業として実施した市川橋遺跡、山王遺跡、新田遺跡の7地区の調査成果を収録したものです。調査の規模の大小はありますが、本市の歴史を考える上で貴重なデータを提供したことは疑いありません。これらの積み重ねが、本市の具体的な歴史像の解明につながり、ひいては文化財を生かしたまちづくりに活用できるものと考えております。

最後に、発掘調査の実施や本書の刊行にあたり、多大なご協力をいただきました関係機関の方々に対し厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

1. 本書は、平成17年度の国庫補助事業で実施した7件の調査成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
3. 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、市川橋遺跡の調査基準線については、X=-189,200.000、Y=13,850.000（南北・東西大路交差点の中央付近）の交点を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに、東西方向は東にE1・E2…、西にW1・W2…、南北方向は北にN1・N2…、南にS1・S2…と表示している。
4. 掘団中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6. 本書の執筆は、調査員全員の協議のもとに、Iを廣瀬真理子、II・Vを武田健市、IIIを村松稔、IV・VI・VIIを石川俊英が担当し、編集は石川が行った。遺構の図版作成では廣瀬真理子・大友貴晴、遺物の写真撮影は村松稔・廣瀬真理子が担当した。
7. 市川橋遺跡第54次調査で出土した柱材の樹種については、東北大学理学研究科附属植物園大山幹成氏にご教示を得た。
8. 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I. 遺跡の地理的・歴史的環境	1	V. 山王遺跡第52次調査	31
II. 市川橋遺跡第52次調査	3	VI. 山王遺跡第53次調査	38
III. 市川橋遺跡第54次調査	13	VII. 新田遺跡第32・33次調査	41
IV. 山王遺跡第50次調査	19		

調　　査　　要　　項

1. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
2. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤慶輝
3. 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 主任主査 千葉孝弥
研究員 石川俊英 武田健市
技師 村松 稔
発掘調査員 岩永知子 大友貴晴 廣瀬真理子
4. 調査協力者 阿部勝雄 山内慎也 阿部正義 赤間保裕 伊藤孝二 相澤博昭 佐藤 覚（地権者）
5. 調査従事者 赤間かつ子 井口幸男 伊東泰彦 遠藤一代 大場勝喜 大山貞子 岡本典子
小野玉乃 小野寺恵子 小幡 武 菊田百合子 佐藤十五 塩井一征 清水 亮
鈴木政義 鈴木芳恵 田中裕子 南城美岐子 浜田優美子 平山節子 藤澤拓司
藤田恵子 松田正樹 柳 裕順 若生美津枝
6. 整理従事者 遠藤友美 高木一枝 中村千恵子 松崎祥子 村上和恵 橋山佳織

No	調査名	所在地	調査期間	調査面積	調査員
1	市川橋遺跡第52次	城南二丁目13-2	平成17年4月7日～19日	54m ²	武田・岩永
2	市川橋遺跡第54次	城南一丁目3-2・3-3	平成17年11月7日～15日	22m ²	村松・廣瀬
3	山王遺跡第50次	山王字中山王20-3	平成17年4月5日～28日	112m ²	千葉・石川・大友
4	山王遺跡第52次	山王字前田9-1外 山王字山王四区7	平成17年5月9日～6月30日	343m ²	武田・岩永
5	山王遺跡第53次	南宮字町8-1	平成17年5月10日～24日	32m ²	石川・大友
6	新田遺跡第32次	新田字西2-15	平成17年11月9日～28日	37m ²	石川・大友
7	新田遺跡第33次	新田字西2-16	平成17年11月8日～29日	35m ²	石川・大友

凡 例

- 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
 SB：建物 SA：柱列 SD：溝 SE：井戸 SK：土壙 Pit (P)：柱穴及び小穴
 SX：道路、河川及びその他の遺構
- 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市教育委員会 2003）に従った。
- 瓦の分類は『多賀城跡 政府跡 図録編』（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、『多賀城跡 政府跡 本文編』（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。
- 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年（934）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える見解と（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日条にある「出羽國言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I. 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 市川橋遺跡

本遺跡は、本市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川の東側に形成された標高2～3mの沖積地に立地し、特別史跡多賀城跡の南側及び西側に位置している。その範囲は、東西1.4km、南北1.6kmであり、総面積は約703,000m²におよぶ広大な遺跡である。

本遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡として登録されているが、奈良・平安時代を通じて陸奥国府がおかれた多賀城と密接に関連した古代の遺跡として知られている。これまで実施された発掘調査において多くの貴重な成果を得ているが、最も注目されるのは多賀城南面に施行された古代の方格地割りの発見である。これは、南北大路・東西大路と呼んでいる二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方に区画され、まち並みが形成されたものである。このまち並みについては古代地方都市と位置づけられており、内部及び周辺からは、規則的に配置された大規模な建物群や四面庇付建物跡、上級官人の邸宅などを構成する掘立柱建物跡や井戸跡、河川やそれに架かる橋など多数の遺構が発見されている。

2. 山王遺跡

本遺跡は、本市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川と本市西部を北西から南東方向に貫流する七北田川に挟まれた、標高3～4mの微高地上に立地している。その範囲は、東西約2km、南北約1kmの広さを有する。東は市川橋遺跡、西には新田遺跡が隣接し、大規模な遺跡群を形成している。

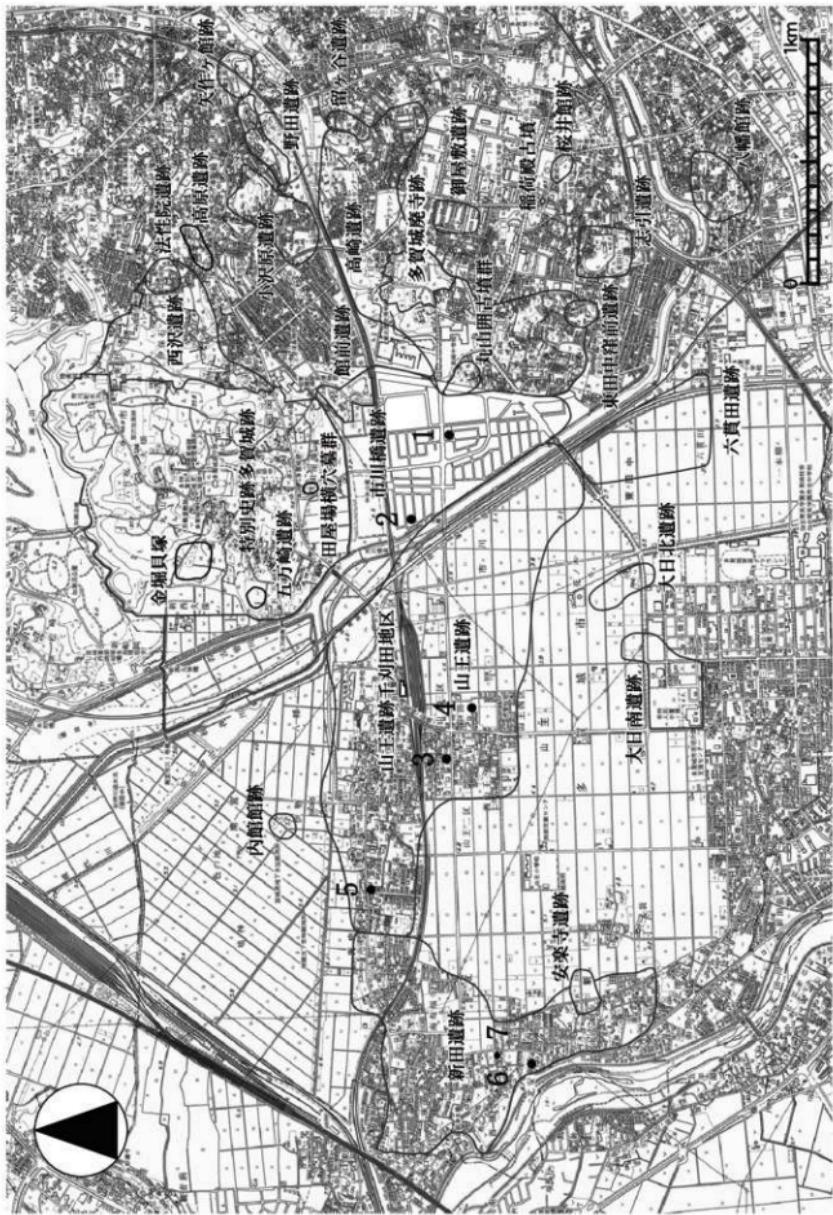
本遺跡は、弥生時代から近世にかけての複合遺跡として登録されており、弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割り、大溝によって区画された中世の屋敷跡、近世の堀跡や井戸跡などが発見され、多くの成果を得ている。特に、古代の方格地割りは、東側に位置する市川橋遺跡にかけて広がっており、古代の地方都市のあり方を考える上で、注目される。近年の調査では、大路沿いには大規模な四面庇付掘立柱建物跡や井戸跡を備えた国司館、大路より一区画離れた場所の中には下級官人の住まいや工房などが発見され、地割内で土地の選定が行われたことが明らかになっている。

3. 新田遺跡

本遺跡は、本市西部を北西から南東方向に貫流する七北田川東岸に形成された、標高5～6mの微高地上に立地し、本市の西端部に位置している。その範囲は、東西0.8km、南北1.6kmの広さを有する。

本遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡として登録されている。遺跡東部にあたる寿福寺地区では、大溝をめぐらせた大規模な屋敷群が発見され、12世紀後半から16世紀にかけて連続して形成されていましたことが明らかとなった。これは、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられ、また、位置的には留守氏が支配する「高用名」及び「南宮庄」に含まれる地域であることから、それらは留守氏と深く係わるものと想定される。

第1図 調査地の位置



II. 市川橋遺跡第52次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年1月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、基礎工事の際に直径5cm、長さ6mの銅管杭146本を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。本地区については、多賀城南面に施工された方格地割りの基幹道路である東西大路の東延長部（東西大路東道路）の推定線上に当たることから、保存を前提とした基礎工法の変更も検討された。しかし、建物を支える十分な地耐力を得るために工法の変更は不可能であるとの結論に達したことから、直ちに発掘調査の実施を前提とした協議を行うこととなった。3月23日、地権者より埋蔵文化財包蔵地に係る発掘調査の依頼を受け、4月上旬より調査に着手することとなった。

4月7日、重機により対象区の表土(1-1~III層)除去に取りかかった。遺構検出面まで約1.5mと厚いことから、作業時の安全及び調査面積の確保のため、表土をすべて場外に搬出した。11日より遺構の検出作業を行った。水中ポンプを稼働させることになった。14日、東西大路真撮影を行う。その後、層位毎に埋土を掘り下げ、15日真撮影を行い、同日午後より検出した遺構の平面・断面する。19日、これら一連の作業が終了し、器材の撤収及び22日、調査区の埋め戻しが完了したため、施工業者への

2 調查成果

(1) 層序

今回の調査区で確認した層序は、以下のとおりである。

1-1層：区画整理に伴う現代の盛土で、厚さは1.5mである。

J-2層：現代の水田耕作土で、厚さは15~25cmである。

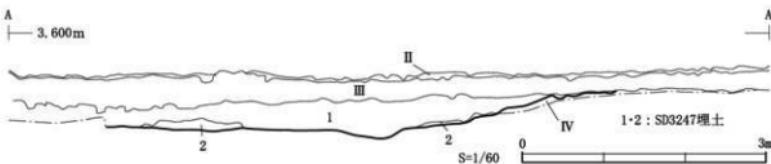
II 層：黒褐色粘土で、厚さは4～6cm。旧水田耕作土と考えられる。

Ⅲ 層: 灰白色火山灰が二次堆積する黒褐色及び褐灰色粘質土である。厚さは20~40cmであり、灰白色火山灰が粒状または小ブロック状に二次堆積している。周辺の調査成果より、10世紀前葉以降の古代の堆積層と考えられる。

IV 層：黒色粘土が混入する灰黄褐色土で、厚さは10cm以上。上面はS D3247東西大路東道路北側溝の検出面である。周辺の調査成果より、古代の最終遺構検出面と考えられる。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区西壁断面図

(2) 発見遺構と遺物

S D3247溝跡（第3～7図）

東西大路東道路の北側溝である。S K3248と重複し、それよりも新しい。今回検出した規模は、長さ5.8m、上幅7m以上、深さ40～50cmである。北壁は非常に緩やかに立ち上がっており、底面にはほとんど凹凸が認められない。底面レベルは東側から西側に向かって僅かに傾斜しており、比高は約10cmである。埋土は2層に分けることができる。1層は黒褐色粘土、2層は黒褐色砂質土であり、1層には植物遺体が多く確認された。遺物は、土師器杯（A類・B I・B II・B V類）・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）・高台付杯・瓶・甕、竈形土器、丸瓦（II B類）、平瓦（II B a・II C類）、砥石、木簡、挽物皿、曲物、鎌柄などが出土している。このうち、土師器杯では底部にヘラガキ（「×」）が施されているもの、須恵器杯では墨書き器（「伴」）や漆付着土器も少量認められる。木簡は、上端部が一部欠損するものの、それ以外は原形をとどめている。オモテ・ウラとも平滑に調整されているが、文字は確認することができない。

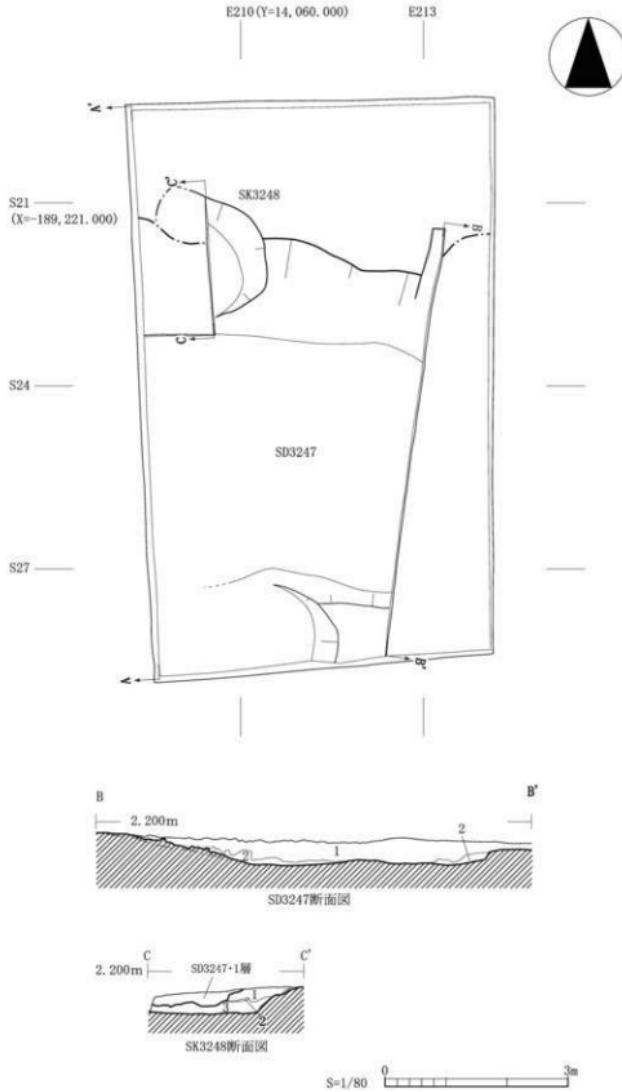
S K3248土壤（第3図）

調査区北部で発見した土壤である。S D3247と重複し、それよりも古い。平面形は不整形であり、規模は長軸2.2m、深さ42cmである。底面は概ね平坦であり、壁は若干の起伏を伴いながら緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けることができる。1・3層は黒褐色粘土もしくは粘質土であり、このうち1層には灰黃褐色粘質土がブロック状に混入している。2層は灰黄色砂である。遺物は、須恵器甕の小片が出士している。

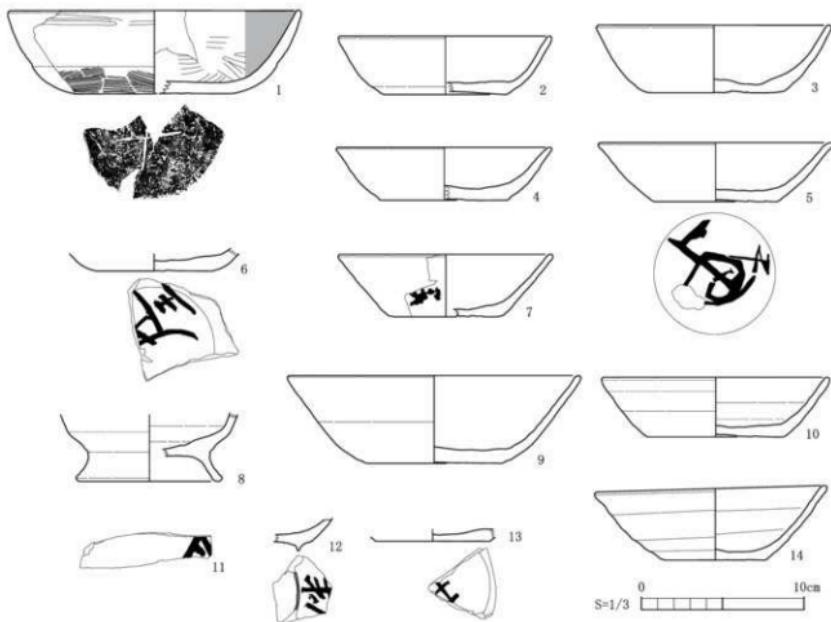
3.まとめ

今回の調査では東西大路東道路の北側溝 S D3247を確認した。第27次調査の成果（註）によると、東西大路東道路の北側溝には6時期の変遷（A→F期）が確認されており、今回発見した S D3247は、遺構の位置や規模等から判断するとE期に対応することが明らかである。E期については、それより古いD期側溝から延暦年間（782～805）の木簡が出土していること、側溝の最上層に10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰が自然堆積していることなどから、本文には記載されていないものの概ね9世紀頃の年代が想定される。今回発見した S D3247の年代についても、灰白色火山灰の自然堆積は認められなかったものの、出土遺物に10世紀に下るもののが確認されないことから、E期の年代観と一致していると判断できよう。

註 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003



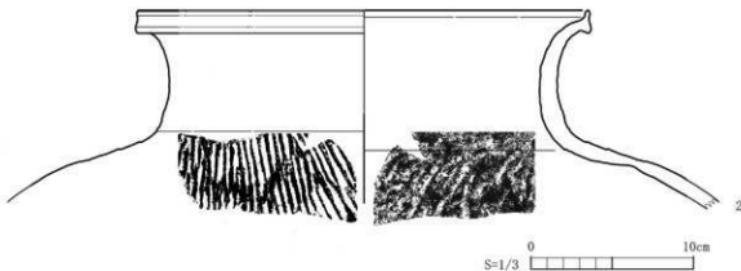
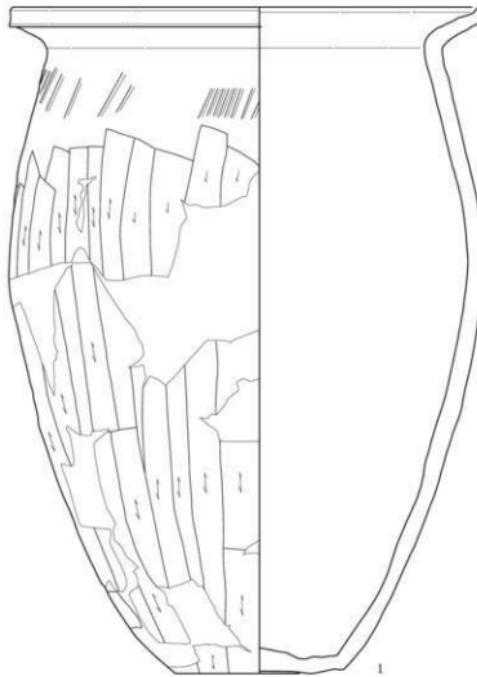
第3図 SD3247ほか平面図・断面図



単位: cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 底径 残存率	底深 底径 残存率	基高	写真図版	登録番号	備考
			外 面	内 面						
1	土師器・杯	S D3247・1層	ハケメ、ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	(14.5) 5/24	(8.0) 10/24	4.15	2-1	R9	A類
2	須恵器・杯	S D3247・1層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 7/24	(7.6) 11/24	3.6		R14	重類
3	須恵器・杯	S D3247・1層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	(14.4) 7/24	(8.5) 24/24	4.15		R16	重類
4	須恵器・杯	S D3247・1層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 4/24	(7.8) 10/24	3.25		R15	重類
5	須恵器・杯	S D3247・1層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	(14.4) 6/24	(7.5) 24/24	3.6	2-4	R4	重類、墨書き
6	須恵器・杯	S D3247・1層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	—	(7.4) 9/24	—	2-3	R5	重類、墨書き
7	須恵器・杯	S D3247・1層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 1/24	(6.8) 5/24	3.85		R17	重類、墨書き
8	須恵器 高台付杯	S D3247・1層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(8.6) 8/24	—		R12	
9	須恵器・杯	S D3247・2層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	(18.0) 6/24	(8.2) 14/24	5.4		R11	重類
10	須恵器・杯	S D3247・2層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	(14.0) 10/24	(8.4) 2/24	3.65		R13	重類
11	土師器・杯	S D3247・1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	—	—	—		R8	墨書き
12	土師器 島台付杯	S D3247・1層	ロクロナデ、回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	—	—	—	2-2	R6	墨書き「伴」
13	須恵器・杯	重層	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	—	(7.0) 5/24	—		R7	重類、墨書き
14	須恵器系土器・杯	重層	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	14.3 24/24	6.2 24/24	4.55		R18	

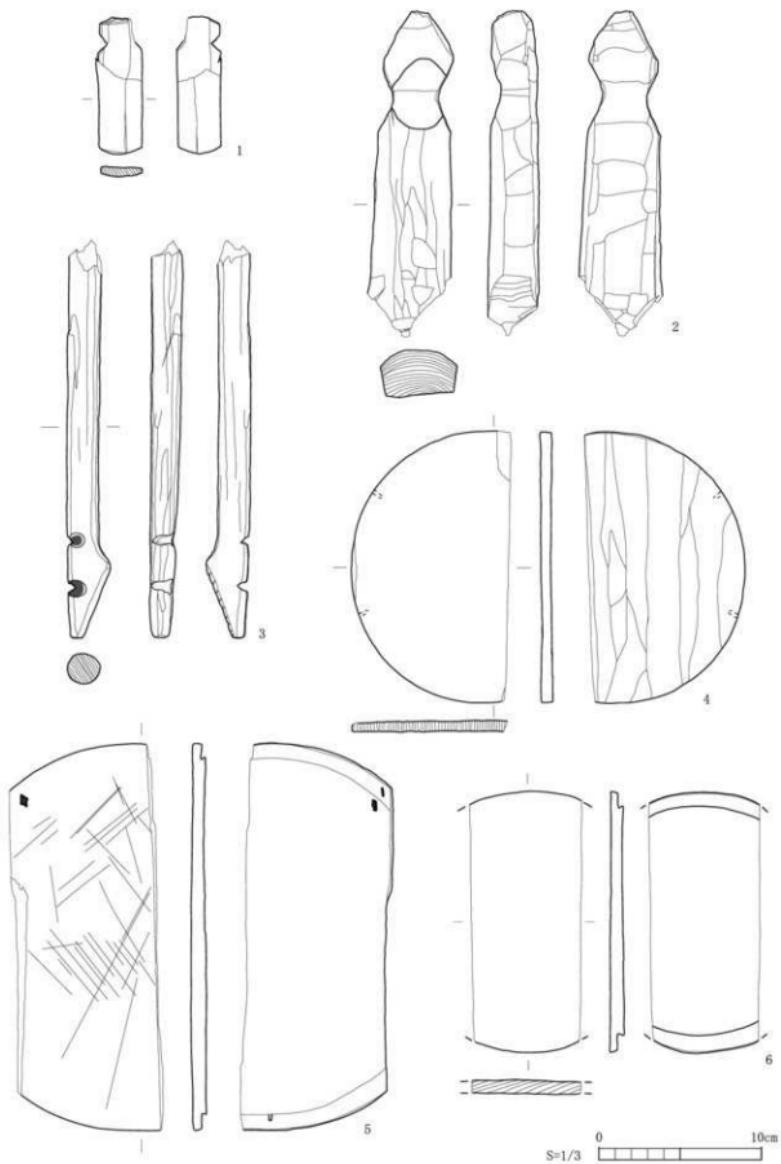
第4図 出土遺物(1)



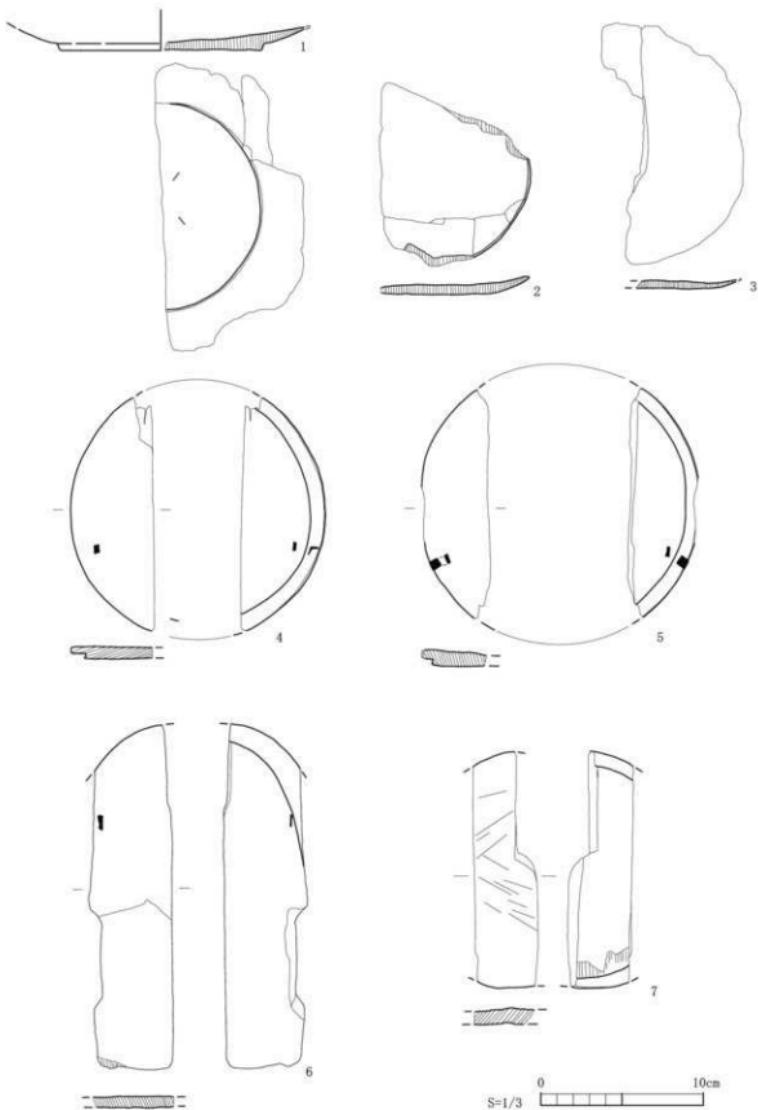
単位: cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
			外面	内面						
1	土器器・甕	S D3247・1層	平行タタキ、ヘラケズリ、ロクロナデ		23.2 19/24	8.4 18/24	33.05		R 1	B類
2	須恵器・甕	■層	平行タタキ、ロクロナデ	ロクロナデ、当其底	(22.4) 4/24	—	—		R 3	

第5図 出土遺物(2)



第6図 出土遺物(3)



第7図 出土遺物(4)

第6回観察表

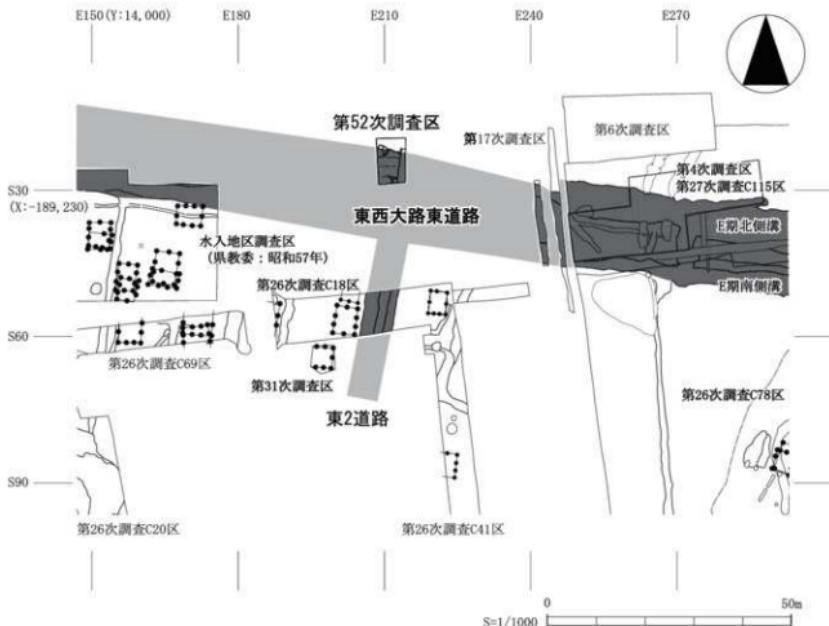
単位: cm

番号	種類	遺構・部位	法量	写真図版	登録番号	備考
1	木	板	SD3247・1層 長さ: 8.4、幅: 2.7、厚さ: 0.5		R7	木筋合分類: 032 木筋番号: 122
2	不明木製品	SD3247・1層	長さ: ~、幅: 4.9、厚さ: 2.9		R12	未製品か?
3	木製品・縫合	SD3247・1層	長さ: ~、直径: 2.0	2-5a・b	R15	火焔口に転用
4	木製品 円形曲物	SD3247・1層	径: 16.6、厚さ: 0.7		R13	木筋結合
5	木製品 円形曲物	SD3247・1層	径: 24.0、厚さ: 1.2		R11	有段、樹皮縫合
6	木製品 円形曲物	SD3247・1層	径: (16.0)、厚さ: 0.8		R8	有段

第7回観察表

単位: cm

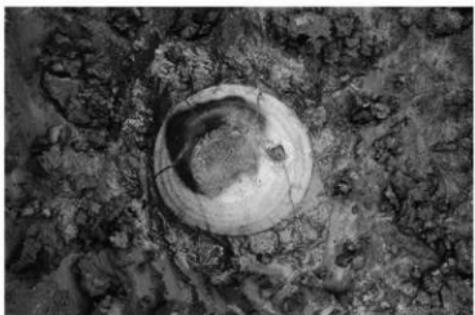
番号	種類	遺構・部位	法量	写真図版	登録番号	備考
1	木製品 挽物高台付盤	重版	口径: ~、底径: 12.4、高さ: ~		R10	ロクロ爪瓶
2	木製品 挽	重版	口径: ~、底径: ~、高さ: ~		R14	
3	木製品 挽	重版	口径: ~、底径: ~、高さ: ~		R9	
4	木製品 円形曲物	重版	径: (16.0)、厚さ: 0.8		R3	有段、樹皮縫合
5	木製品 円形曲物	重版	径: (17.4)、厚さ: 1.0		R4	有段、樹皮縫合
6	木製品 円形曲物	重版	径: ~、厚さ: 0.7		R2	樹皮縫合



第8図 第52次調査区と周辺遺構配置図



1. 調査区全景（南東より撮影）



2. III層須恵系土器出土状況



1



2



3



4



5a



5b

- 1 土師器杯・ヘラガキ「×」第4図1 R 9
- 2 土師器高台付杯・墨書「伴」第4図12 R 6
- 3 須恵器杯・墨書 第4図6 R 5
- 4 須恵器杯・墨書 第4図5 R 4
- 5a・5b 木製品鍊柄 第6図3 R15

写真図版2

III. 市川橋遺跡第54次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年10月7日、地権者より当該地における住宅建設と埋蔵文化財文化財の関わりについて協議書が提出された。建設計画では、基礎工法に直径114.3mmの鋼管杭を地下9mまで26本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により造構の保存が計れないか協議を行なったが、申請された工法で実施することに決定した。これを受け地権者から11月2日付けで発掘調査の依頼があり、7日から現地において重機で表土（I層）除去を行った。なお安全を考慮し、表土は場外へ搬出した。現地表から約1.9m掘り下げたところ、II層上面で昭和26年から行われた河川改修前の砂押川を発見した。これにより調査区の大部分が壊されていたが、南側壁面を観察したところ、III層上面に造構を発見した。8日

にⅡ層を除去し、9日にⅢ層上面の遺構検出作業を行った結果、柱穴や溝跡等を発見した。以後、写真撮影・実測図作成等を随時行なった。10日に溝跡の埋土を掘り下げ、11日に柱穴の半截を行なった。14日に調査区の全景写真を撮影し、15日に補足的に図面を作成した後、器材の撤収と埋め戻しを行い、現地調査を終了した。

2. 調查成果

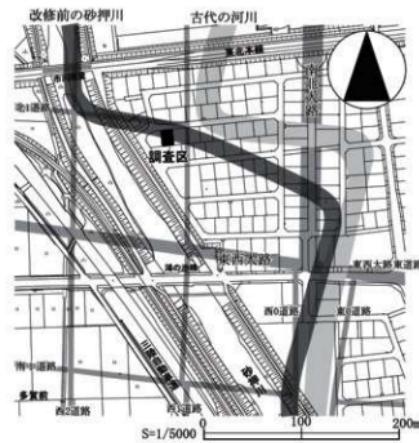
(1) 層序

I-1層 区画整理に伴う盛土層で厚さは約1.4m。

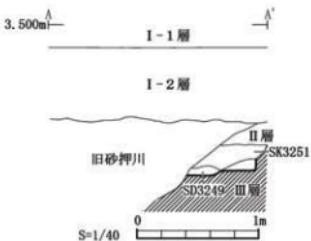
1-2層 現代の水田耕作土層で厚さは41~50cm。

II 層 オリーブ黒色砂層で厚さは18~25cm。河川改修前の旧砂押川検出面。

III 層 漆黄色シルト層。この上面が古代の遺構検出面。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区東壁断面図

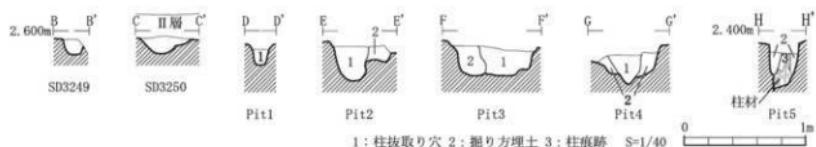
(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では溝跡2条、土壌1基、柱穴を発見した。これらは全てⅢ層上面で発見した。

SD3249溝跡（第2・4図）

調査区南半部で発見した東西方向の溝跡である。SK3251および柱穴と重複しており、SK3251より古く、柱穴より新しい。規模は、長さ4.3m以上、上幅17cm以上、下幅8~12cm、深さ12~16cmである。

方向は東で約13度南に偏している。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、調査区内での比高はほとんどない。埋土は小さいⅢ層ブロックを含むオリーブ黒色シルトである。遺物は土師器杯・甕（B類）、須恵器杯、丸瓦（II類）が出土している。



第3図 遺構断面図

S D3250溝跡（第3・4図）

調査区南部で発見した南北方向の溝跡である。SK3251と重複しておりこれより古い。規模は長さ72cm以上、上幅24~30cm、下幅10~12cm、深さ4~14cmである。方向は北で約6度東に偏する。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

S K3251土壤（第2・4図）

調査区南部で発見した土壤である。SD3249・3250および柱穴と重複しており、これらより新しい。規模は上幅36cm以上、下幅26cm以上で、深さは6~12cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は黒色シルトである。遺物は出土していない。

その他の遺構（第3・4図）

調査区南部で柱穴を発見した。調査区が狭く、また北側の大部分を河川改修前の砂押川によって壊されているため、建物や柱列として確認することができなかった。掘り方の平面形は円形もしくは方形であり、前者が直径16~52cm、後者が一辺46~48cmである。柱痕跡を確認できたのは1基のみで、他は全て抜き取られている。掘り方埋土が淡黄色もしくは浅黄色シルトで、柱抜取り穴が黒褐色黄灰色シルト、柱痕跡は黒色粘土である。柱痕跡が確認できたPit5には柱材が残っており、樹種はカヤである。遺物は、Pit1の柱抜取り穴から土師器杯・甕（B類）、須恵器瓶が、Pit2の柱抜取り穴から土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯、須恵系土器杯が、Pit3の掘り方から土師器杯（B類）・甕（B類）、丸瓦（II b類）、Pit4の柱抜取り穴から土師器杯（B類）・甕（B類）が、Pit5の柱抜取り穴から土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器瓶が、出土している。

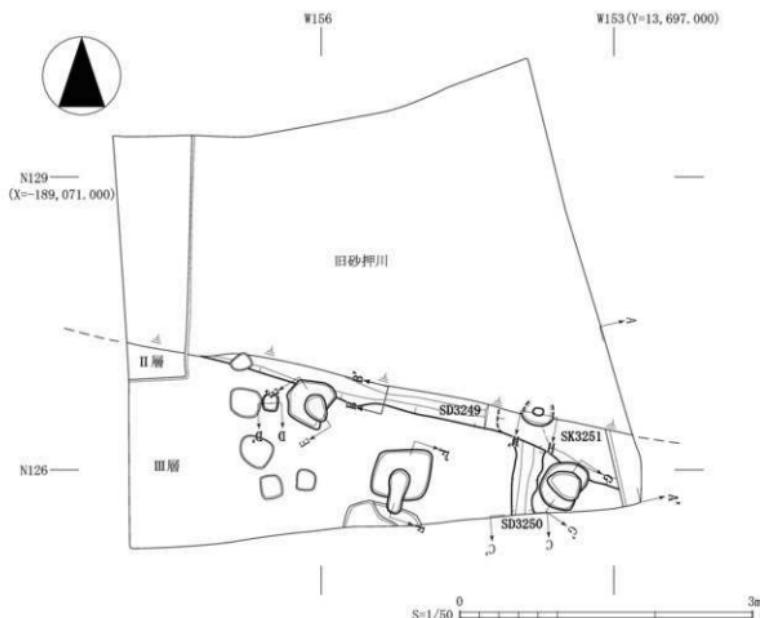
(3) 遺構外出土遺物

I層から、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（III類）・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付杯、灰釉陶器碗、丸瓦（II類・II b類）、平瓦（I a類・I b類）、竈形土器（第4図1）、鉄滓、II層から土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（III類・V類）・甕・長頸瓶、須恵系土器杯、丸瓦（II類）・製塩土器（第4図3、写真図版2-4・5）が出土している。

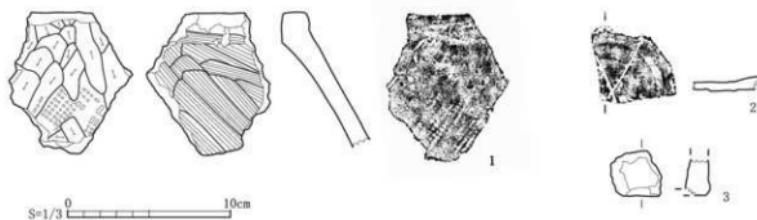
3.まとめ

今回の調査では、溝跡2条、土壤1基、柱穴を発見した。年代については、Pit2の柱抜取り穴から須恵系土器が出土していることから、廃絶の年代が10世紀前葉以降と考えられる。他の遺構に関しては、

土師器杯・甕のB類が出土していることから、上限の年代は8世紀後葉以降である。下限の年代は中世以降の遺物が出土していないことから、およそ古代の範疇に含まれると考えられる。



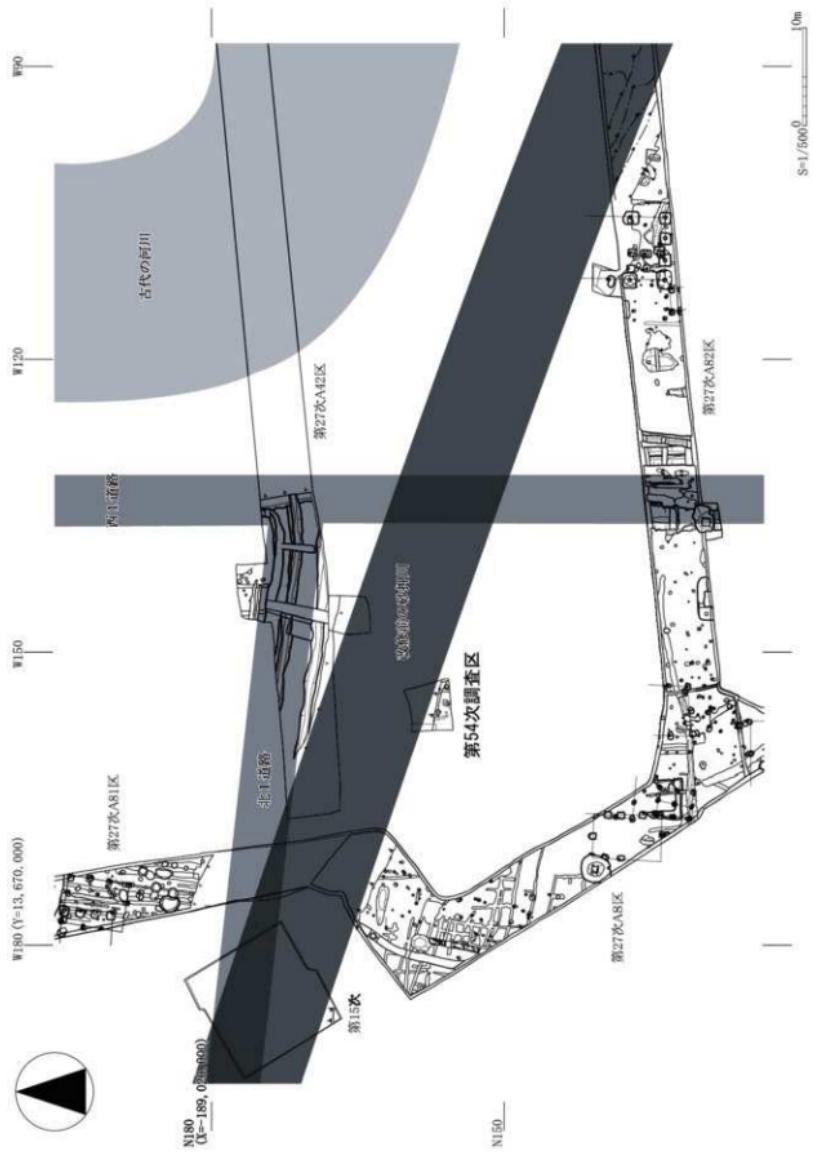
第4図 調査区平面図



番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 或 残存率	底径 或 残存率	器高	写真番号	備考	単位: cm
			外 面	内 面						
1	織形土器	I層	格子叩き→手持ちヘラケズリ	ナデ	—	—	—	2-1-1	R-1	
2	須恵器・甕	II層	底部: ヘラ切り	ロクロナデ	— (0.0) 6/24	—	—	2-1-2	R-2	底部ヘラガキ「×」
3	製塙土器	II層	—	—	—	—	—	2-1-3	R-3	

第5図 出土遺物

第6図 第54次調査区と周辺の調査区





調査区Ⅲ層上面南側 遺構検出状況（東より）



調査区Ⅲ層上面全景（北西より）



Pit 2（北東より）



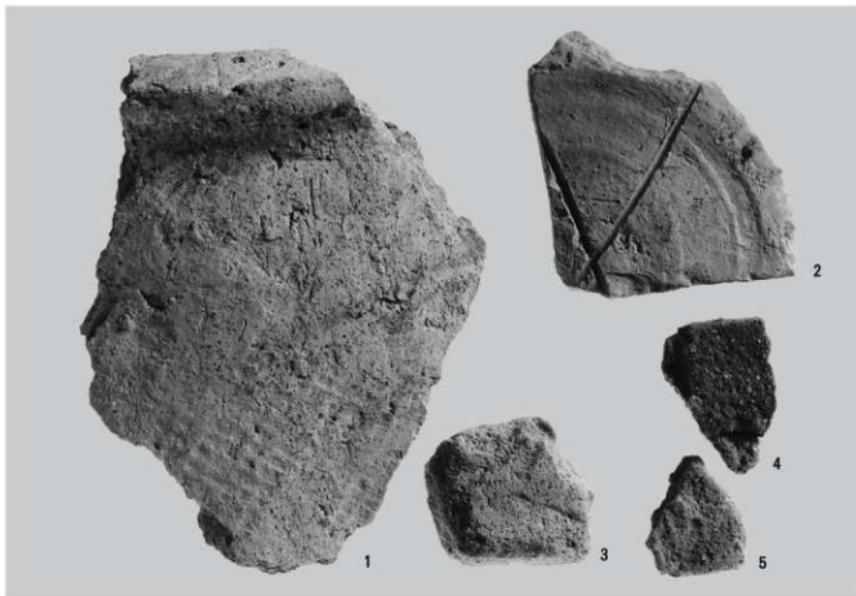
Pit 3（西より）



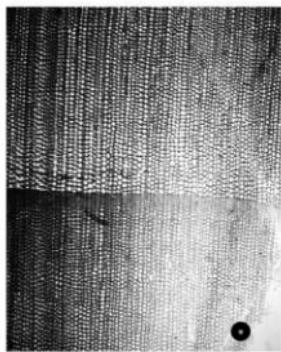
Pit 4（北西より）



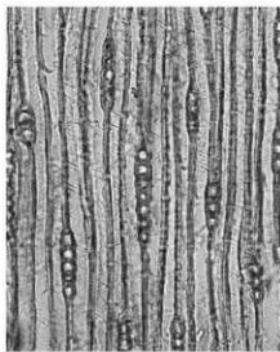
Pit 5（北西より）



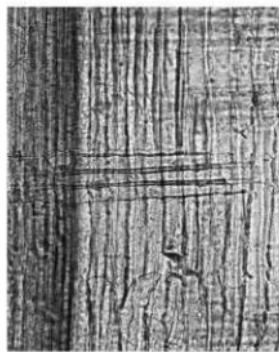
出土遺物 (1: 瓢形土器 第4図1 R1、2: 須恵器杯 第4図2 R2、
3: 製塙土器 第4図3 R3、4: 製塙土器 R4、5: 製塙土器 R5)



1a. カヤ C×60



1b. カヤ T×120



1c. カヤ R×240

la~c: Pit 5 出土柱材
C: 横断面(木口)、T: 接線断面(板目)、R: 放射断面(桿目)
×の後の数字は最終倍率を示す。

出土木材顕微鏡写真

写真図版 2

IV. 山王遺跡第50次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。平成17年3月、地権者より当該区における住宅建築計画と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅の基礎工法に直径60cm、長さ7mの钢管杭を41本打ち込むソイルコラム工法を採用することから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため発掘調査を前提とした協議を行い、平成17年3月23日に依頼書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は4月5日より開始した。機械力によってI・II層をすべて除去し、掘削土は調査対象地内の安全面と調査面積の確保のため、全て場外へ搬出した。調査区はかつて水田であったところであり、南壁際には畦畔の痕跡が壇状の高まりとして残っていた。翌日から遺構検出作業に入り、III層上面で掘立柱建物跡、溝跡、土壤等を発見した。東壁付近で発見したS B 1131や西壁付近で発見したS A 1132は残存状況が悪く、旧地形はかなり改変されていると推定された。

11日平面図作成のため基準点の設定を行い、精査を終えたものから順次実測図を作成していった。20日、調査区の全景写真を撮影し、III層上面の遺構についてはおおよそ調査が終了した。21日から下層遺構の有無を確認するため、調査区北壁際に沿って長さ約9m、幅約1mの試掘坑を設定した。その結果、古代の遺構の検出面となっている土層は砂と砂質土が厚く堆積する河川の堆積土と考えられ、それ以外の遺構は存在しない可能性が大きいと判断した。26日から翌日にかけて、III層上面検出遺構の平面図の修正や深掘りした地点の土層断面図を作成し、28日には埋め戻し作業を行って現地調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

調査区内の層序はおおよその三層に大別できる。

I層 現代の表土（I-1層）、現在の宅地造成時の盛土（I-2層）、現代の水田耕作土（I-3層）に細分できる。I-1・I-2層は調査区全域に、I-3層は調査区南壁を除く範囲に認められる。厚さはI-1層が18~32cm、I-2層が厚さは40cm、I-3層が7~15cmである。

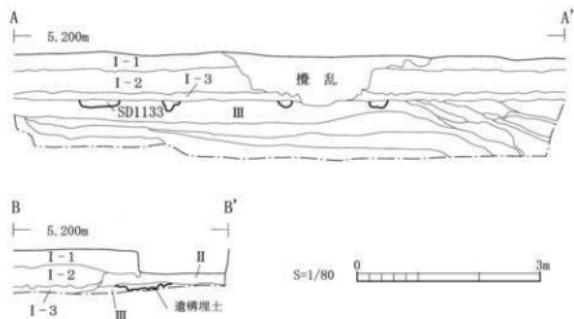
II層 現代の水田の畦畔部分に堆積しているオリーブ黒色砂質土である。調査区南東部においてのみ確認できた。厚さは12~22cm。

III層 黄灰色の砂およびにぶい黄色の砂質土層であり、上面は古代の遺構の検出面となっている。調査



第1図 調査区位置図

区北壁際の試掘坑を約1m掘り下げたところ、各層は西側から東側に傾斜して堆積しており、薄いスクモ（亜泥炭）層が間層となっている。これらは河川の堆積土とみられるものであるが、遺物が出土していないため年代等は不明である。



第2図 北・東壁断面図

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡2棟、柱列跡1条、溝跡2条、土壤2基とそれより古い河川跡1条を発見した。掘立柱建物、柱列跡、溝跡、土壤の検出面はすべてⅢ層（河川跡堆積土）上面である。

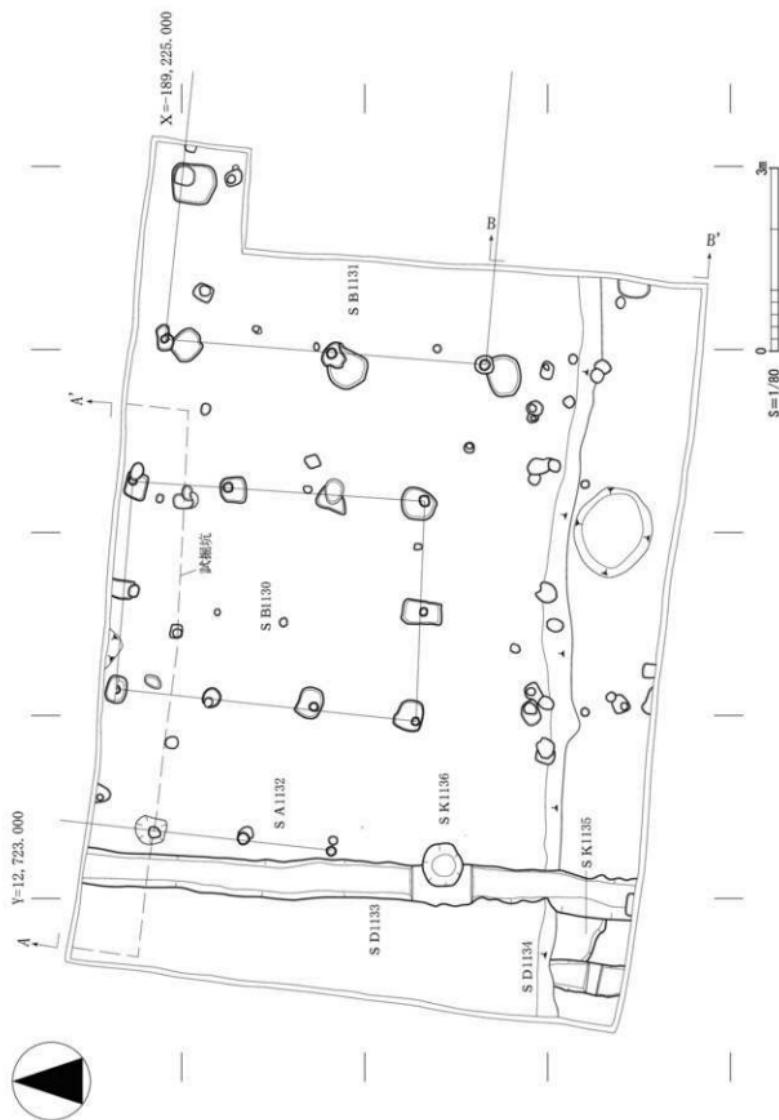
S B1130掘立柱建物跡（第3・4図）

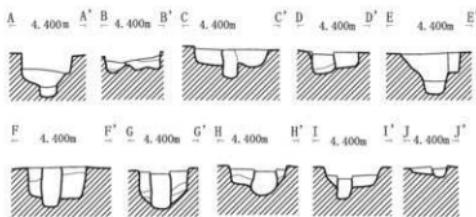
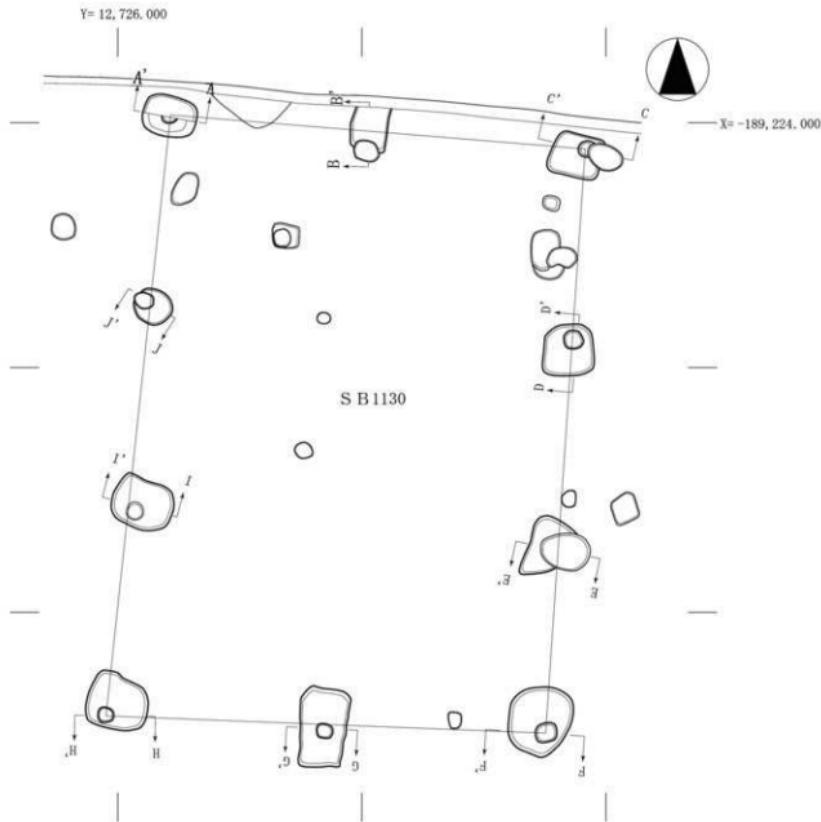
調査区中央部で発見した桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。すべての柱穴を検出し、その多くのものに柱の当たり痕跡を残す抜取り穴を確認した（註1）。方向は東側柱列で見ると、北で4度5分東に偏している。桁行については、西側柱列で約4.9m、柱間は南より1.69m、1.73m、約1.5m、東側柱列で4.77m、柱間は南より3.19m（2間分）、1.59mである。梁行については、南妻で3.61m、柱間は西から1.80m、1.81mであり、北妻は約3.5mである。掘り方の平面形は、円形を呈するものもあるが方形を基調とするものが多い。前者のうち最も大きなものは長辺64cm、短辺52cmであり、深さは35cmである。後者については直径58cm、深さは32cmである。埋土は黒色粘質土・にぶい黄色土の小粒を含んだ黒褐色粘質土である。柱の当たり痕跡を残す抜取り穴は直径10~19cmであり、埋土はにぶい黄色土を多く含む黒褐色粘質土である。北妻の棟通り下と北西隅の柱穴は全体が抜取り穴によって破壊されているものであるが、その埋土からは灰白色火山灰の小ブロック（直径1~3cm）が検出されている。

遺物は、抜取り穴から内外両面にヘラミガキ・黒色処理を施した土師器杯と須恵器杯の小片が各1点出土しているのみである。

（註1）柱の当たり痕跡を残す抜取り穴としたものは、平面形が円形を呈し、その断面も直立するなど柱痕跡と類似した特徴を有している。しかし、その埋土内には地山のブロックや小粒が多く含まれ、多くの遺物が出土することなどの点から短期間に人為的に埋め戻された様相を呈しており、柱痕跡とは明確に区別すべきものと考える。ただし、柱位置については原位置をとどめていると考えられることから、柱痕跡と同程度の有効な数値として表示した。

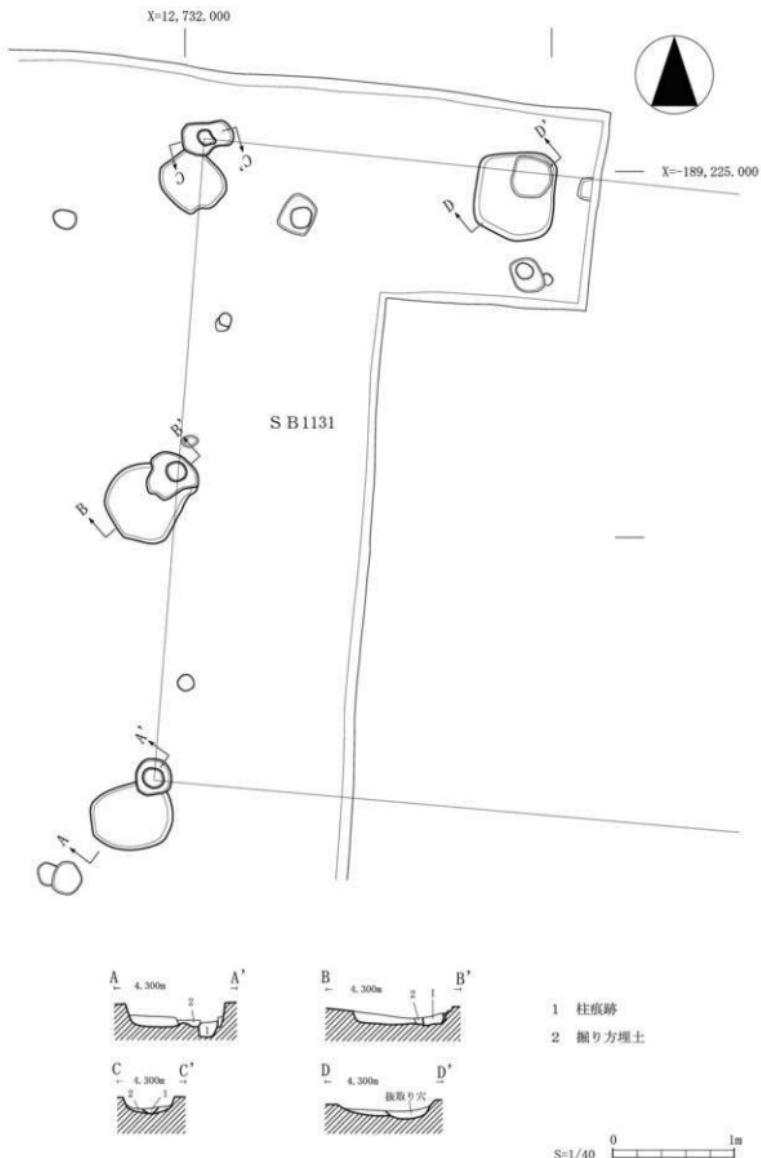
第3圖 遺構平面圖





0
S=1/40 2m

第4図 S B 1130平面図・断面図



第5図 S B1131平面図・断面図

S B1131掘立柱建物跡（第3・5図）

調査区東半部で発見した南北2間、東西1間以上の掘立柱建物跡である。柱穴を4基検出したのみであり、大部分が調査区外にあるため、形状や規模については不明である。3基の柱穴で柱痕跡、1基の柱穴で抜取り穴を確認している。また、西側の柱列では各柱穴の南西に古い掘り方を検出しているが、いずれも柱を立てた形跡は認められず、1時期の建物として理解した（註2）。

本建物跡の方向は、柱痕跡を確認できた西側の柱列で見ると北で6度26分東に偏している。柱間は同じく西側の柱列で総長5.24m、柱間は南より2.49m、2.74mである。北側の柱列は1間分が約2.7mである。掘り方の平面形は方形、円形、楕円形、不整形と一様ではない。規模は、方形を呈する北側の柱穴でみると長辺72cm、短辺64cm、深さは10cmであり、埋土は黒色砂質土と炭化物をわずかに含んだ暗緑灰砂質土である。円形を呈する南西隅の柱穴でみると直径約30cm前後、深さは28cmで、埋土は黒色と黒褐色粘質土を含んだ青灰色砂質土である。柱痕跡は直径13～16cmの円形であり、埋土は黒色粘質土で灰白色火山灰粒（直径0.5～1.0cm）を含んでいる。なお、北側の柱穴では抜取り穴の底面で礎板の痕跡を確認している。

遺物は掘り方から土師器杯・甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ類）・瓶、須恵系土器高台付鉢、柱痕跡から土師器甕（B類）、須恵器杯・甕が出土している。

古い掘り方については、その中心に柱位置を想定すると、西側の柱列で総長約5.1m、柱間は南より約2.5m、約2.7mであり、北側の柱列は1間分が約2.7mである。平面形は方形を基調とし、規模は最も大きなもので長辺80cm、短辺76cm、深さは8cmである。埋土は灰オリーブ色砂質土で、地山ブロックを多く含んでいる。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯の小破片が少量出土している。土師器甕はロクロ調整を施したもので、外面に叩き、内面に回転ハケメ調整が観察される。

S A1132柱列跡（第3・6図）

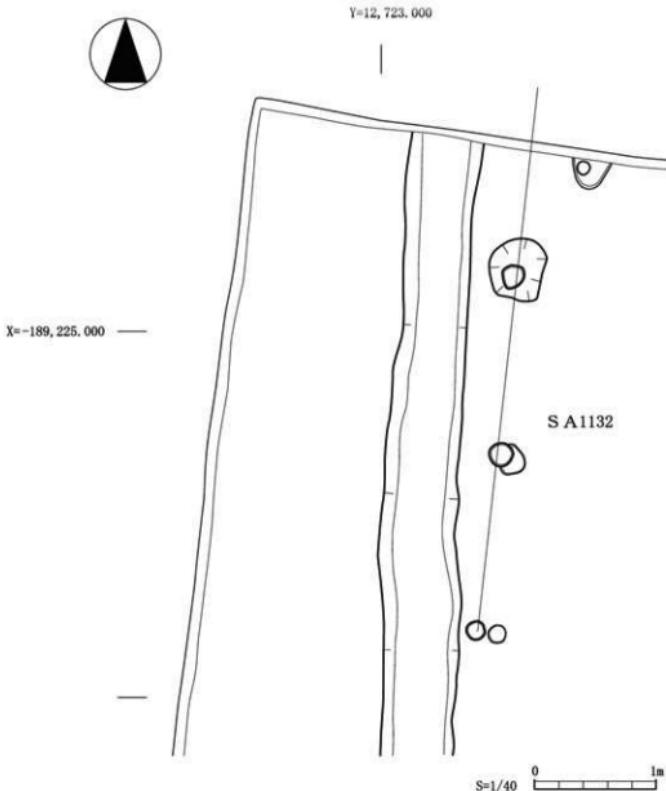
調査区西半部で発見した柱列跡である。南北方向に並ぶ3基の柱穴を検出し、東西両側においてこれと組み合う柱穴を検出できなかったことから、南北2間以上の柱列跡と考えたものである。残存状況が悪く、いずれの柱穴でも抜取り穴を確認したのみである。その中心に柱位置を想定すると、方向は北で約6度東に偏しており、柱間は南より約1.5m、約1.4mである。北側の柱穴でみると、抜取り穴の平面形は不整形であり、規模は長軸方向で約50cm、短軸方向で約45cm、深さは約30cmである。埋土はオリーブ褐色砂質土である。抜取り穴は平面形が円形であり、規模は直径12～18cmである。埋土はオリーブ褐色土を主体とし、黒褐色粘質土や灰白色火山灰粒（直径0.5cm）が含まれている。

遺物は抜取り穴から土師器甕（B類）が出土している。

S D1133溝跡（第3・7図）

調査区西半部で発見した南北溝跡である。調査区の南壁・北壁間で検出したもので、さらに調査区外へ延びている。SK1135・1136と重複しており、それより古い。方向は北で約3度東に偏している。規模は上幅45～68cm、深さは10～15cmであり、壁はやや急に立ち上がっている。底面は、南壁と北壁で12cmの

（註2）古い掘り方が使用されることなく埋め戻された原因としては、建物構築に際し、想定した柱位置に誤差が生じた状況など考えることができよう。古い掘り方間の寸法がSB1131の柱間と一致することは、その間の事情を裏付けるものであろう。当初掘削した掘り方を埋め戻し、やや位置をずらして一回り以上小規模な柱穴を掘り直した建物跡は、山王遺跡八幡地区のSB5151（多賀城市埋蔵文化財調査センターほか：1991）、多賀城跡のSB471（宮城県多賀城跡調査研究所：1972）などで発見されている。



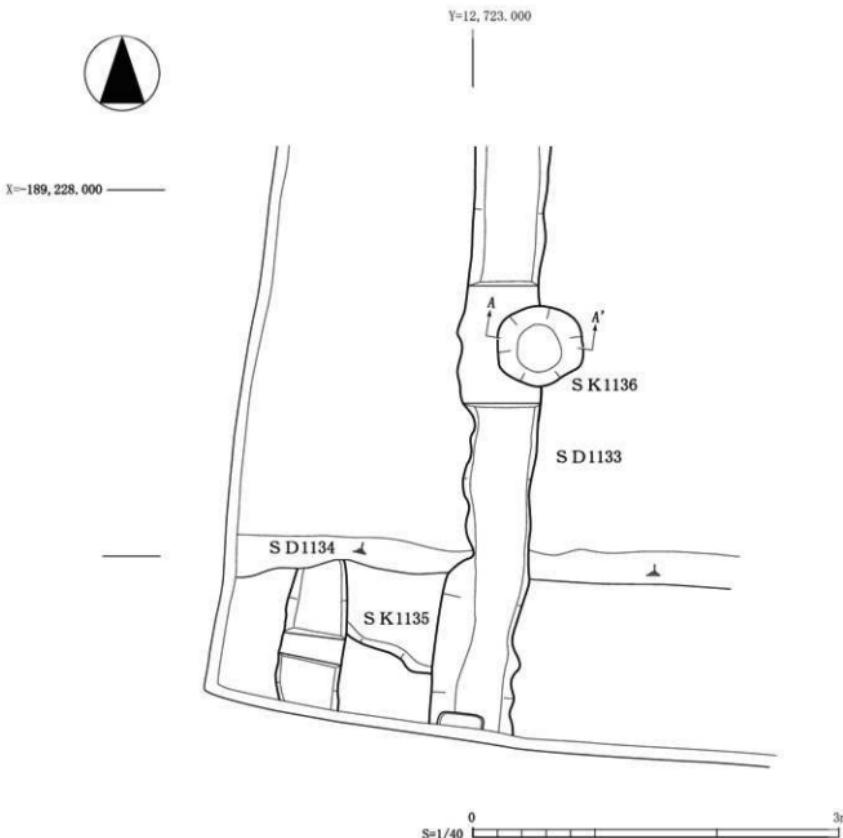
第6図 S A 1132平面図

比高があり、北から南へ向かって緩やかに傾斜している。埋土は黄色粘質土を主体とする上層と、黒色粘質土やにぶい黄色粘質土粒を少量含む黒褐色粘質土の下層とに区分される。上層は黒褐色粘質土をわずかに含んでいるが、色調・土性ともにⅢ層ときわめて類似しているという特徴がある。いずれも自然堆積層と見られる。

遺物は上層から土師器甕、須恵器杯（V類）・瓶の小破片が数点出土している。

S D 1134溝跡（第3・7図）

調査区南西隅で発見した南北溝跡である。調査区南壁から1.3m検出したのみであり、その北側は現代の水田によって破壊されている。S K 1135と重複しており、それより古い。方向は北で約6度東に偏して



第7図 SD1133・1134、SK1135・1136平面図

おり、規模は上幅48~52cm、深さは10cmである。壁は急に立ち上がっており、底面はおおよそ平坦である。埋土は黒褐色砂質土を含むにぶい黄色粘質土の単層である。

遺物は出土していない。

S K1135土壤（第3・7図）

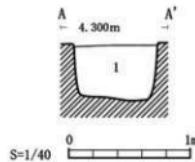
調査区南西隅で発見した土壤である。SD1133・1134と重複しており、それらより新しい。平面形は、おおよそ方形であり、規模は東西1.2m、南北0.7m以上、深さは6~10cmである。底面はおおよそ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は灰黄色粘質土をわずかに含む黒褐色土の単層である。

遺物は土師器杯・甕（B類）、須恵器杯・甕・瓶の小破片が少量出土している。

S K1136土壤（第3・7・8図）

調査区西半部で発見した土壤である。S D1133と重複しており、それより新しい。平面形はおおよそ円形であり、規模は直径約70cm、深さは48cmである。底面は平坦であり、壁立ち上がりは急である。埋土は黒褐色粘質土ブロックを多く含む灰黄色粘質土であり、人為的に埋められた様相を呈している。

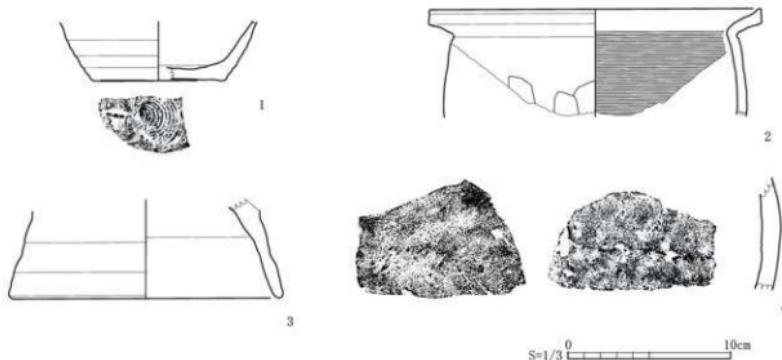
遺物は土師器杯・甕（B類）、須恵器杯・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器椀（あるいは皿）、綠釉陶器碗（あるいは皿）、丸瓦、平瓦、無釉陶器甕などが出土している。すべて破片資料であり、特徴的な部位をとどめているものはほとんどない。



第8図 S K1136断面図

遺構外出土の遺物

I・II層より土師器杯・甕（B類）、須恵器杯（V類）・高台付杯甕・瓶、須恵系土器杯、灰釉陶器椀（あるいは皿）、綠釉陶器碗（あるいは皿）、丸瓦、平瓦、無釉陶器甕などが出土している。すべて破片資料であり、特徴的な部位をとどめているものはほとんどない。



番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 横存率	底径 横存率	器高	写真図版	登録番号	備考	単位：cm	
			外面	内面								
1	須恵器・甕	S D1133・検出面	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ		(8.2) 3/24			R 1	V類		
2	土師器・甕	P32振り方	ロクロナデ、体部下半：手持ち ヘラケズリ	ロクロナデ 回転ハケメ	(22.4) 4/24	—	—		R 2	B類		
3	須恵系土器・ 台付き鉢	P12振り方	ロクロナデ	ロクロナデ スス付着		(16.8) 3/24			R 3			
4	無釉陶器・甕	I層	タテ方向のヘラナデ	指押さえ ヨコナデ		—	—		R 4			

第9図 出土遺物

3. 遺構の年代と性格

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡2棟、柱列跡1条、溝跡2条、土壙2基、およびそれより古い河川跡である。以下それらの年代について検討する。

S B1131は古い掘り方から須恵系土器高台付鉢が出土している。須恵系土器は灰白色火山灰層の上下から出土するとされることから、概ね10世紀前葉・中葉頃の年代が与えられているものであるが、多賀城跡第61次調査では、大型の台付鉢・鉢は9世紀後半代にも少量含まれるとしている（宮城県多賀城跡調査研究所：1992）。その考えに従えば、S B1131の年代は9世紀後半以降となる。一方、本建物跡の柱痕跡には灰白色火山灰の小ブロックや小粒が含まれており、火山灰が降下した10世紀前葉以前には廃絶していたとみられる。したがって、本建物跡の年代は9世紀後半から10世紀前葉の間に求めることができる。

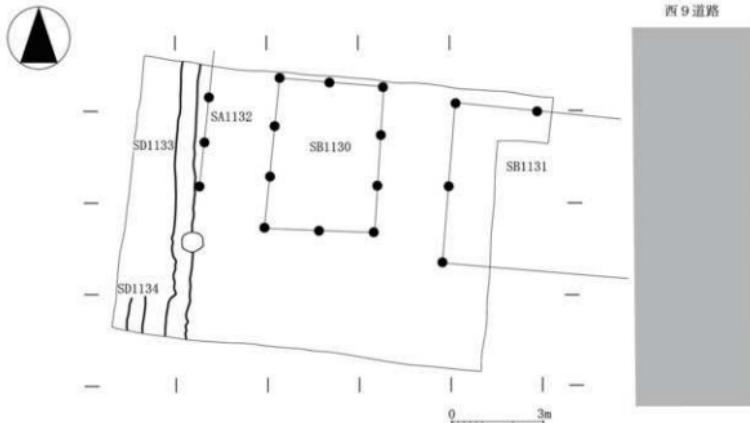
S B1130は、北妻棟通り下の柱穴の抜取り穴が灰白色火山灰の小ブロックを含む小ビットと重複し、それより古いことが確認されている。小ビットの年代は10世紀前葉以降であるから、S B1130はそれ以前に廃絶したと考えられる。

S A1132は抜取り穴の埋土に灰白色火山灰の小ブロックを含んでいる。したがって10世紀前葉以降に廃絶したことが知られる。

S D1133は埋土から回転糸切りで切り離した後再調整を加えない須恵器杯が出土している。このような手法で製作された須恵器杯は、多賀城周辺では8世紀後葉に出現し、9世紀代には普遍的に見られるものである。したがって、本溝跡の年代は8世紀後葉以降である。

各遺構の年代について整理すると以下のとおりである。

- S D1133……………8世紀後葉以降
- S B1131……………9世紀後葉から10世紀前葉の間
- S B1130……………10世紀前葉以前
- S A1132……………10世紀前葉以降



第10図 遺構模式図

ところで、これらの遺構はいずれのものとも重複しておらず、S A1132をのぞく S B1130・1131、SD1133には新旧関係が把握できない。位置関係についてみると、S B1131とS B1130の間は2.30～2.36m、S B1130とSD1133の間は2.36～2.64mであり、8尺間隔の計画性が窺われる。方向についても、S B1131は北で6度26分、S B1130は4度5分、SD1133は約3度東に偏するものでおおよそ近い数値と見ることができる。このような状況から、S B1130・1131、SD1133は同時期に存在した可能性が考えられ、年代についても9世紀後葉から10世紀前葉の間と推定すると矛盾しない。

次に、発見した遺構の性格について簡単に触れておきたい。第50次調査区は、多賀城外の方格地割りを構成する西9道路の西側に隣接し、幹線道路である東西大路からは約185m南側に位置している。現時点において、方格地割りが施工された範囲の西側を画する小路は西9道路と考えられていることから、S B1130・1131、SD1133などはその外側に位置していることになる。

S B1130・1131、SD1133については、主軸方向が方格地割りを構成する道路の方向とおおよそ一致し、掘立柱建物によって構成されるという特徴があり、方格地割り内における遺構のあり方と共に通るものである。方格地割りが施工された区画については基本的に宅地と考えているが、その外側に位置する遺構群の評価については、今後類例の増加を待って検討する必要があろう。

4. まとめ

- (1) 掘立柱建物跡2棟、柱列跡1条、溝跡2条、土壤2基、およびそれより古い河川跡を発見した。
- (2) 発見した掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡などの年代は、9世紀後半から10世紀前葉にかけてである。
- (3) それらの遺構は、方格地割りの西限をなす西9道路の西側に計画的に配置されたと考えられる。

参考文献

- 多賀城市埋蔵文化財調査センター・建設省東北地方建設局仙台工事事務所『山王遺跡－第10次発掘調査概報（仙塙道路建設に伴う八幡地区調査）－』多賀城市文化財調査報告書第27集 1991
宮城県多賀城跡調査研究所「V 第18次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1972』1973
宮城県多賀城跡調査研究所「III 第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992



調査区全景（西より）



調査区全景（東より）



SB1130 (P 4) (西より)



SB1130 (P 6) (東より)



SD1133溝跡土層及び遺物出土状況（北より）

V. 山王遺跡第52次調査

1. 調査に至る経緯と経過

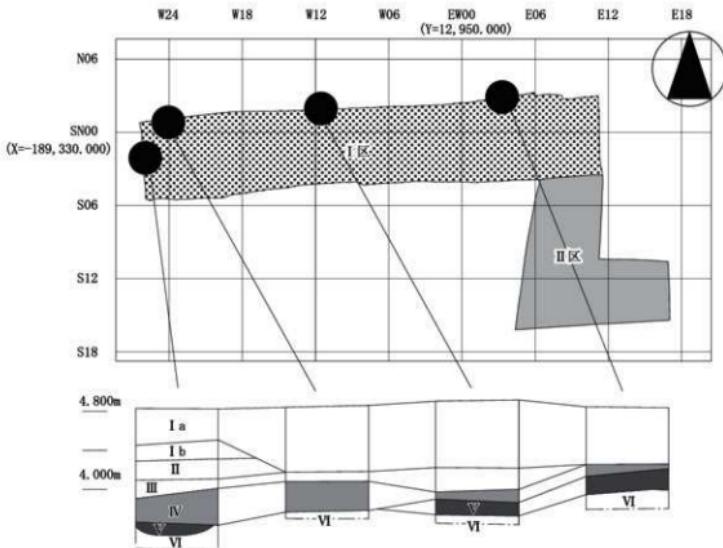
本調査は、山王字前田・字山王四区地内における小規模開発行為（位置指定道路建設）に伴う確認調査である。平成17年4月、地権者より当該区における位置指定道路建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現在畠地として利用している場所に、幅6m、長さ65mの道路を建設し、将来的には周辺を宅地として利用するという計画であった。本地区周辺では、南東側約50mの地点で第34次調査（平成10年）を実施していたものの、小範囲な調査であったため遺構の性格や密度など不明な点が多く、その成果を基に本調査に係る費用を積算することが困難であった。また、対象区東端部が多賀城外を区画する地割りのうち西7南北道路の推定線上に当たる可能性が高く、古代の方格地割りを復元する上で位置的にも重要な地点であると考えられた。そのため、地権者及び開発業者と協議を重ねた結果、事前に遺構の状況を把握するための確認調査を実施し、これを踏まえて本発掘調査の期間及び経費を積算することで合意に達した。なお、調査に際し、道路予定箇所に設定した東西トレンチをI区、西7南北道路推定線上に設定した南北トレンチをII区とした（第2図）。

5月9日、重機によりI区の表土除去を行い、調査区のほぼ全域で現表土より80cm下層の黒褐色粘質土（IV層）上面で、多数の柱穴や土壤、溝跡などを発見した。後世の大規模な擾乱も多数存在していたため、遺構面に影響がない範囲で重機を使用し、これらの除去を行った。一方、東端部では擾乱がIV層以下にまで及んでおり、古代の最終遺構検出面と考えられるにぶい黄橙色砂質土（VI層）が一部露出するような状況であった。翌10日より、人力による擾乱埋土の除去及び遺構の精查を開始するとともに、土層観察を兼ねた排水用の側溝を調査区内に切り回した。この結果、IV層上面では東半部と西半部に掘立柱建物跡が集中していること、断面観察より遺構検出面が3面（IV・V・VI層）存在すること、東端部のVI層上面には西7南北道路が存在していることなどが明らかとなった。5月20日、実測図作成のための基準点を設置し、検出作業が終了したものから随時平面図（S:1/20）の作成を開始する。5月26日に平面図の作成が終了したことから、翌27日に調査区全景の写真撮影を行い、I区の確認調査を終了した。

II区の調査は、6月1日から開始した。重機を用いて表土除去を行うが、上面の大部分に後世の擾乱が及んでおり、この除去に多くの時間を費やした。6月6日より、擾乱埋土を除去した箇所から遺構検出作業を開始する。その結果、II区では西7南北道路跡やこれより新しい大規模な南北方向の溝跡、井戸跡な



第1図 第52次調査区と周辺の調査区



第2図 調査区配置図と層序模式図

などを発見した。6月28日、実測図作成のための基準点を調査区内に移動し、平面図(1/20)の作成を開始する。翌29日、西7南北道路の年代や変遷等を明らかにする目的で、調査区南端部において一部埋土の掘り下げを行う。同日、直ちに断面図(1/20)の作成を行い、6月30日に全景写真を撮影してII区の確認調査を終了した。

2. 調査成果

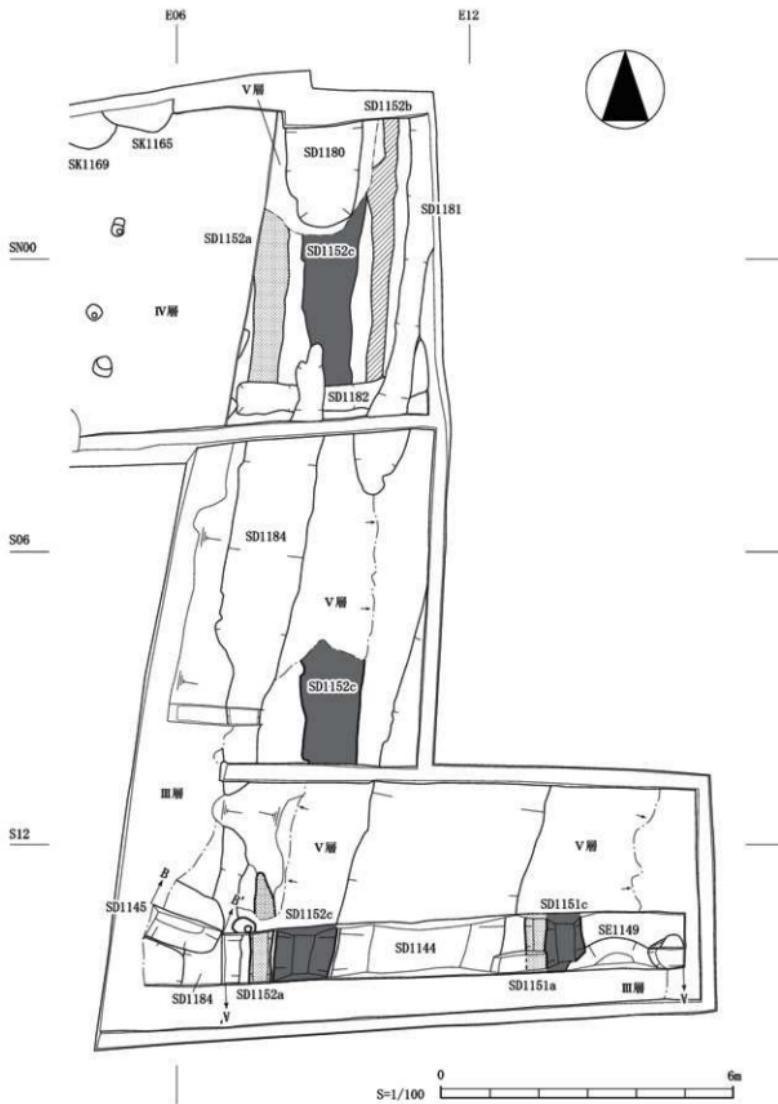
(1) 層序(第2図)

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

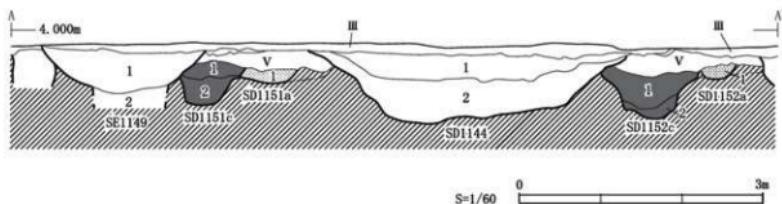
- I - 1層：現代の造成による盛土で、厚さは40～80cmである。調査区の東側ほど深く堆積している。
- I - 2層：I区西端部で確認した褐色粘土の旧水田耕作土である。厚さは15～25cmであるが、現在の造成工事の際に中央から東側のすべてが失われている。
- II 層：I区西端部で確認した褐色粘質土で、厚さは15～30cmである。現在の造成工事の際に中央部から東側すべてが失われている。
- III 層：I区東半部及びII区中央部を除く調査区全域で確認した黒色粘質土で、厚さは10～30cmである。近世以降の造構検出面である。

第3図 調査区平面図





第4図 I区東端部・II区造構平面図



第5図 II区南端部断面図

- IV 層：I区東端部及びII区中央部を除く調査区全域で確認した黒褐色粘質土で、厚さは10~40cmである。中世の遺構検出面である。
- V 層：I区東半部及びII区で確認した黒褐色粘質土で、にぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。厚さは10~20cmであり、中世以前の遺構検出面と考えられる。
- VI 層：調査区全域で確認したにぶい黄橙色砂質土で、厚さは30cm以上である。周辺地区の調査成果から、古代の最終遺構検出面と考えられる。

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、西7南北道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などを発見した。I区で検出した遺構については本発掘調査の報告書（註）で述べることとし、ここではII区で発見した遺構について記載する。

S X1150西7南北道路跡（第4・5図）

I区東端部及びII区で発見した南北道路跡である。南北大路から約890m西に位置しており、城外の方格地割りのうち、西7南北道路に相当する。長さ約17mを検出し、南北とも調査区外に延びている。東西両側に素掘りの側溝を伴っており（東側溝：SD1151、西側溝：SD1152）、これらの新旧関係から3時期の変遷（A→C期）があることを確認した。

A期：東・西側溝（SD1151a・1152a）を確認した。東側溝はII区南端部で僅かに確認したのみであり、その大半がC期側溝により破壊されている。一方、西側溝についてもII区中央部でSD1184溝跡や後世の擾乱によって破壊されており、残存状況は悪い。道路の規模については、残存する箇所（II区南端部）で求めると、側溝心々間で5.65m、方向は西側溝で測ると北で約1度東に偏している。東側溝の規模は、上幅70cm以上、深さ17cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、黒色粘土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入している。西側溝は、上幅42~54cm、下幅32cm、深さ17cmであり、壁は垂直気味に立ち上がっている。埋土は、黒色粘土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に多量に混入している。

B期：A期より東に約2.5m移動して造り替えられている。I区で西側溝（SD1152b）を確認したが、II区では、両側溝共に後続するC期側溝に破壊されており、確認することができなかった。方向は北で約2度東に偏している。西側溝の規模は、上幅27~64cm、深さ18cmである。埋土は、黒褐色粘土が主体であり、灰白色火山灰が小ブロック状に混入している。

（註）多賀城市教育委員会「III 第54次調査」『山王遺跡－第51・54・57次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第81集 2006

C期：I区ではB期より西に約1m移動しているが、II区ではほぼ同位置で造り替えられたものと考えられる。東・西側溝（S D1151c・1152c）を確認した。道路の規模は両側溝が確認できたII区南端部で測ると側溝心々間で5.46m、方向は西側溝で測ると北で約3度東に偏している。東側溝の規模は、上幅69～80cm、下幅34～40cm、深さ約40cmである。壁は下半部が垂直気味に、上半部が緩やかに立ち上がっている。埋土は、上層の黒褐色粘土と下層の黒色粘土の2層に分けられる。西側溝は、上幅75～125cm、下幅34～43cm、深さ43cmである。壁は下半部が垂直気味に、上半部が非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は黒色粘土が主体であり、下層にはにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。

S D1144溝跡（第4・5図）

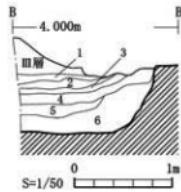
II区中央部で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で約15度東に偏しており、規模は長さ10m以上、上幅約4m、下幅約2m、深さ83cmである。底面はやや起伏があり、平坦でない。壁は多少の凹凸が見られるものの、緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けることができ、いずれも黒色粘土が主体である。遺物は、土師器、須恵器が少量出土している。

S D1184溝跡（第4・5図）

I区東端部からII区で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で約8度東に偏しており、規模は長さ13m以上、幅約1.6mである。埋土は黒色粘土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に混入している。

S D1145溝跡（第4・6図）

II区南西部で発見した東西方向の溝跡である。S D1148と重複し、それよりも新しい。方向は西で約20度北に偏している。規模は長さ1.5m以上、上幅約1.4m、深さ約1mであり、壁は垂直気味に立ち上がっている。埋土は6層に分けることができる。1～5層は、黒色粘土あるいは黒褐色粘土が主体であり、粗砂の混入が認められる。6層は灰色粗砂が主体であり、黒色粘土が多量に混入している。



第6図 S D1145断面図

S E1149井戸跡（第4・5図）

II区南東部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は円形であり、規模は直径約2.2m、深さ60cm以上である。埋土は最上層が暗褐色粘土であり、暗褐色粗砂やにぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入している。

3. まとめ

- (1) I区IV層上面で掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などを発見した。柱穴の形態を見ると、周辺地区で中世とされているものと類似していることから、概ねその頃の年代と考えられる。一方、II区においては幅4mの大規模な溝跡を発見した。上面が後世の攪乱によって破壊されていたため検出面については明らかではないが、I区で発見した掘立柱建物跡と傾きが近似していることから、同時期の区画溝である可能性が高い。
- (2) I・II区VI層上面で、西7南北道路跡を発見した。3時期の変遷（A→C期）を確認しており、B期側溝上面には灰白色火山灰が自然堆積していた。道路の年代は、A・B期が10世紀前葉以前、C期がそれ以降である。



1. I 区全景 (西より撮影)



2. II 区全景 (南より撮影)

写真図版 1

VI. 山王遺跡第53次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は山王遺跡町地区の個人住宅建設に伴うものである。平成17年2月、地権者より当該区における住宅建築計画と埋蔵文化財の係わりについて協議書が提出された。建築工事では、直径5cm、長さ5.5mの钢管杭を117本打ち込む基礎杭工法を計画していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため発掘調査を前提とした協議を行い、平成17年3月28日に依頼書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は5月10日より開始した。重機によって盛土の除去作業に着手したところ、盛土下に異臭を伴う汚染土が確認され、産業廃棄物の可能性が高いと考えられたことから一旦作業を中止した。その取り扱いをめぐって施工業者と協議を進め、翌日にそれらの分布を重機によって調べたところ、敷地内のほぼ全域に及んでいることが判明した。このような状況について、施工主・施工業者との間で協議を行い、産業廃棄物は施工主側が責任をもって除去することとし、それまで調査は中断することとなった。その後、諸般の事情から撤去作業は進展せぬまま時間が経過したが、調査区を長期間放置することが安全管理上の問題となり、さらに産業廃棄物の投棄によって造構面が破壊されている可能性があることから、造構面が残存しているか否かを早急に確認する必要が生じた。そのため20日から調査を再開し、調査区東壁際を南北約6m、東西約1mの範囲で試掘坑を設定し掘り下げたところ、産業廃棄物投棄に伴う擾乱は現地表より約1.3mの深さまで及んでいた。この深さは、周辺地区の調査成果における古墳時代前期頃の造構面とほぼ同じ標高値に達していたが、造構・遺物を確認することはできなかった。このため標高4.1~4.3mまで掘り下げを行ったが、さらに下層に造構面が存在する可能性はきわめて低いと判断されたことから、20日に試掘坑の断面図及び平面図作成や調査区全体の写真撮影等を行い、24日には埋め戻しを行って現地調査を終了した。

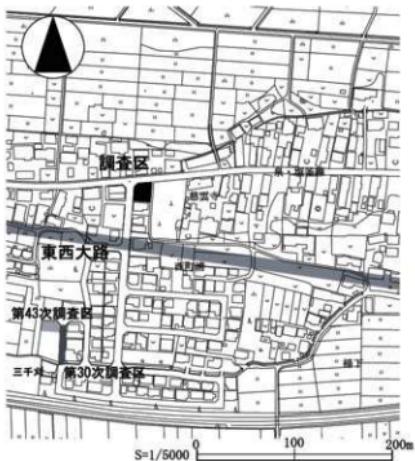
2. 調査成果

(1) 層序

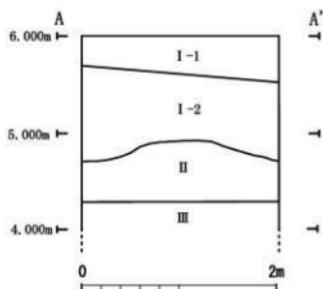
今回の調査によって確認できた層序は以下のとおりである。(第2図)

I-1層 現代の盛土。上面には砂利や碎石があり、調査区全域に堆積している。厚さは50~70cm。

I-2層 産業廃棄物を多量に含む擾乱層。この擾乱はII層以下にも及んでいる。厚さは0.4~1.0mであ

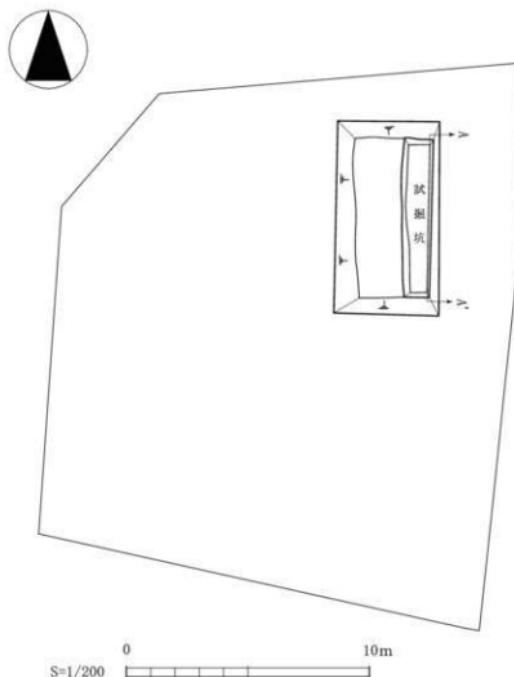


第1図 調査区位置図

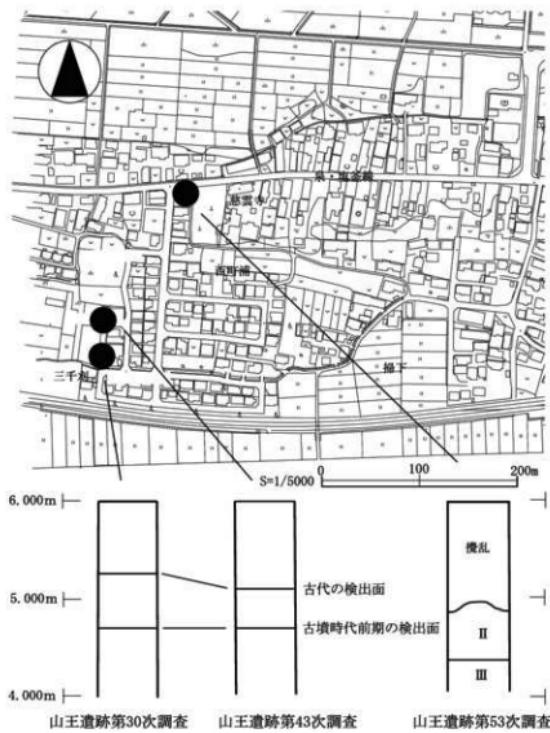


第2図 土層模式図

- り、調査区のおおよそ全域に堆積している。
- II 層 暗灰色粘質土。混入物はほとんど含まず、おおよそ水平に堆積している。下層になるほど粒子は粗くなる。厚さは60cm。
- III 層 緑灰色砂質土。厚さは40cm以上。



第3図 調査区平面図



第4図 遺構検出面模式図

3.まとめ

今回の調査区は著しく擾乱されており、周辺地区の遺構検出面に相当する高さまで掘り下げたが、遺構・遺物を発見することはできなかった。

なお、本調査区と周辺地区との対比については、第4図に示したとおりである。

VII. 新田遺跡第32・33次調査

1. 調査に至る経緯

第32・33次調査はいずれも個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成17年9月、新田字西2-15地内における住宅建築計画と埋蔵文化財の係わりについて、地権者より協議書が提出された。その計画では、住宅の基礎工事に直径60cm、長さ8mの柱状改良杭を33本打ち込むというものであった。

一方10月に入って、その隣接地である2-16地内においても、直径60cm、長さ6.5mの柱状地盤改良杭を31本打ち込む工法による住宅建築計画の協議書が提出された。この2件については、いずれも埋蔵文化財への影響が懸念されることから発掘調査の実施を前提とした協議を行った。両地区が東西に隣接していることから、作業効率を高めるため、両者同時並行で調査を行う方向で日程調整を行い、平成17年11月4日にそれぞれの地権者より依頼書の提出を受け、発掘調査の実施に至ったものである。調査次数については、協議書の提出順とし、西2-15地内を第32次、2-16地内を第33次とした。

2. 調査経過

調査は11月8日より開始した。東側に位置する第33次調査区より着手し、重機によってⅢb層までの除去を行った(～9日)。掘削土については、調査区の安全面と調査面積確保のため場外へ搬出した。翌日より作業員を導入し、Vb層上面における遺構検出作業に着手した。両調査区の北壁際については、層序と下層遺構の有無を確認するため深く掘り下げた結果、両調査区の層序は基本的に対応することが判明し、第33次調査区のVII層上面において柱穴を4基発見した。11日に平面図作成のため基準点を設定し、それらの平面図・断面図の作成や、写真撮影を行った(～24日)。16日、第32次調査区においてもVII層上面において南北溝跡を発見し、重複関係を確認後に埋土を除去する。溝の底面からは南北方向に並ぶ柱穴3基を検出し、順次実測図を作成した。24日翌日に柱穴の断ち割を行う。北壁際における断面観察の結果、VII層より下層には遺構が存在しないと判断されたため、24日に両調査区の全景写真撮影を行った。その後、土層断面図の検討など補足調査を行い、28日には第32次調査区、29日に第33次調査区を埋め戻して現地調査を終了した。

3. 調査成果

(1) 層序

第32次調査区では8層、第33次調査区では4層に区分される層序を確認した。第32次調査区側では特に



第1図 調査区位置図

下層が西側から東側に傾斜している状況が観察され、第33次調査区側についてもその傾向をわずかに認めることができる。

以下、両調査区の層序について対応関係を整理し、まとめて説明する。層の上下で細分できるものは数字で、上下関係が把握できないものはアルファベットを付して表示した。

I 層 宅地造成時盛土（I - 1 層）、造成前の表土（I - 2・3 層）に細分できる。調査区全域にあり、I - 1 層は厚さ 1.5m 前後で上層に 20cm の厚さで碎石があり、I - 2 層は厚さ 2～15cm の黒色土、I - 3 層は厚さ 8～28cm の黒褐色土である。

II 層 黒褐色粘土の自然堆積層である。灰白色火山灰を含まない II - 1 層と、灰白色火山灰小粒を含む II - 2 層に細分され、調査区のほぼ全域に堆積している。厚さは II - 1 層が 2～27cm で、II - 2 層が 2～30cm である。第33次調査区では V b 層やその上面で検出した遺構を直接覆っている。

III 層 第32次調査区に堆積するにぶい黄色土である。厚さは 2～22cm。

IV 層 第32次調査区に堆積している粘質土である。色調によって上層の黒色粘質土（IV - 1）と下層の黒褐色粘質土（IV - 2）に細分され、厚さはそれぞれ 2～8cm、4～18cm である。IV - 2 層は SD1716 溝跡を直接覆っている。

V a 層 第32次調査区の西半部に堆積している灰黄褐色土であり、その上面は SD1716 溝跡の検出面となっている。厚さは 2～16cm であるが、平面的には疎らな分布状況を示している。

V b 層 第32次調査区の東側から第33次調査区にかけて堆積するオリーブ褐色土。その上面は SD1716 溝跡や柱穴の検出面となっている。厚さは 6～16cm。

VI 層 第32次調査区の東側から第33次調査区にかけて堆積するオリーブ褐色土。粒子によって上層（VI - 1）と下層（VI - 2）に細分され、厚さはそれぞれ 5～31cm、11～30cm である。

VII 層 両調査区に見られるにぶい黄色砂質土。厚さは 30～68cm であり、第33次調査区には流木が埋没している。

VIII 層 第32次調査区の西端部で確認した黒褐色砂質土。厚さは 43cm 以上。

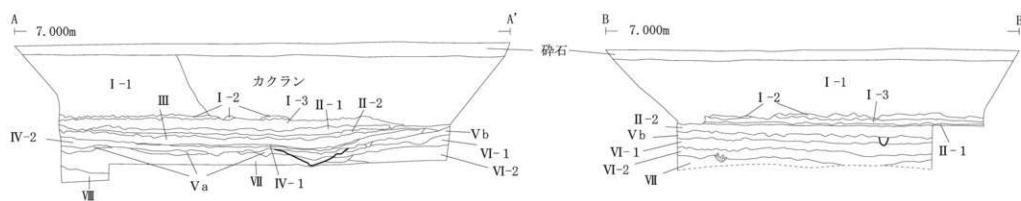
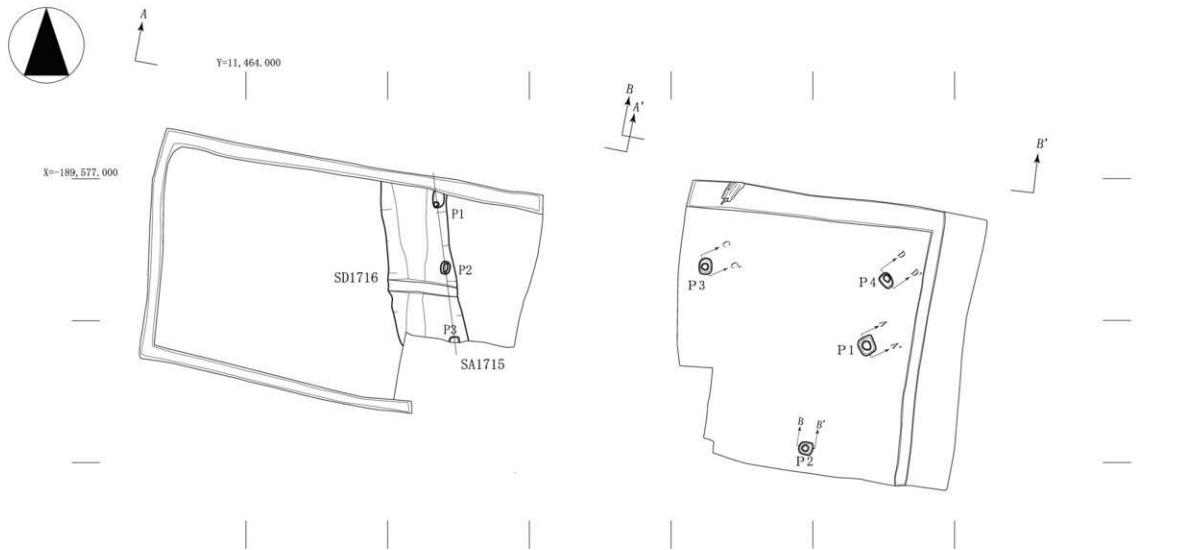
(2) 発見遺構

S A1715 柱列跡（第 2・3 図）

第32次調査区の東半部において発見した柱列跡である。SD1716 の埋土をすべて除去した後、その東壁際で検出した。南北方向に並ぶ 3 基の柱穴から 2 間以上の柱列跡と想定したものであり、そのうちの 2 基の柱穴において柱痕跡を確認した。方向は、北で約 7 度西に偏しており、柱間は北より約 1.4m、約 1.7m である。掘り方の平面形はおおよそ南北に長い長方形であり、規模は長辺 22～35cm、短辺 14～19cm、深さは 5～11cm である。埋土は黒褐色土を含んだ灰黄褐色土と黒色土を含んだ黄褐色土である。柱痕跡は直径 10cm 前後の円形であり、埋土は灰黄褐色土と黒色土を含んだ黄褐色土である。遺物は出土していない。

S D1716 溝跡（第 2・3 図）

第32次調査区の東半部で発見した南北溝跡である。IV - 1 層を除去した後、V a・V b 層上面で検出した。SA1715 と重複しており、それより新しい。方向は北で約 7 度西に偏している。確認できた長さは 3.5m 以上であり、両端は調査区外に延びている。規模は上幅 1.3～1.5m、深さ 6～28cm である。底面から壁面にかけての形状は一様でなく、中央部付近では壁は底面より緩やかに立ち上がっているが、調査区北

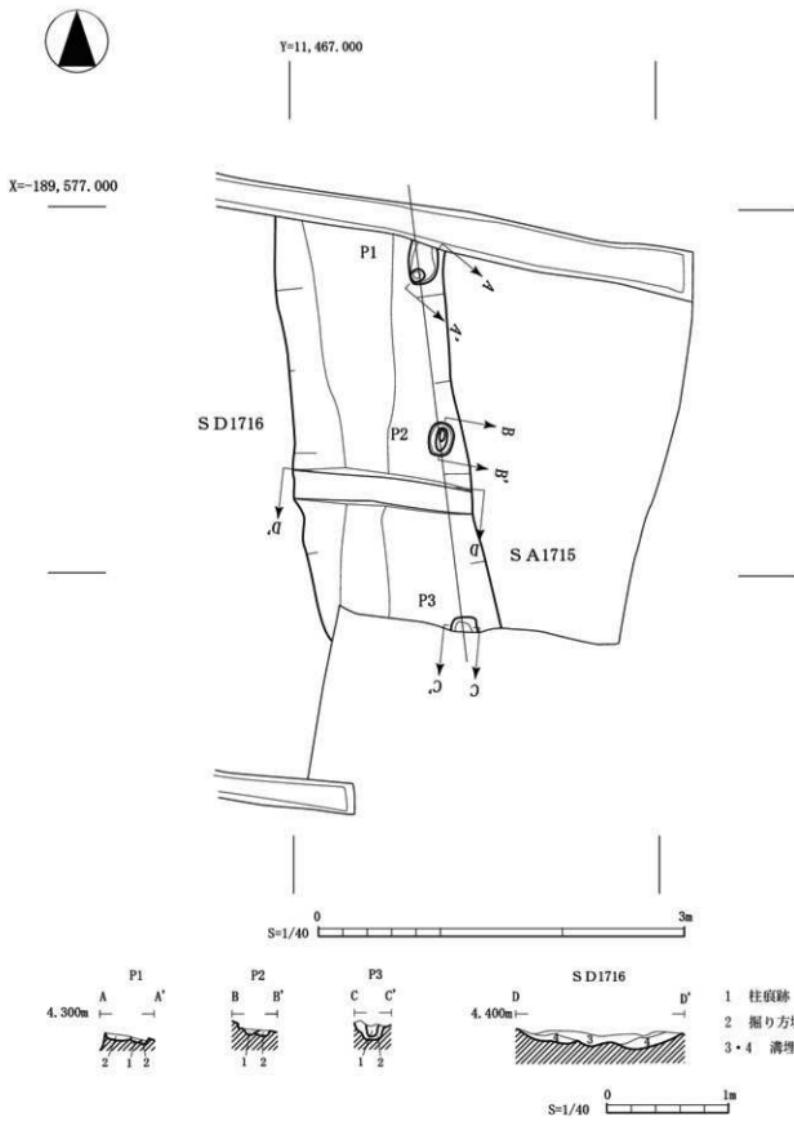


第32次調査区

第33次調査区

S=1/80 0 5m

第2図 調査区平面図・断面図

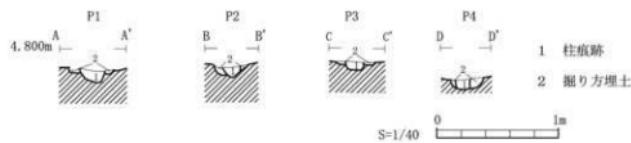


第3図 SA1715・SD1716平面図・断面図

壁付近ではV字状に立ち上がっている。調査区北・南壁でみると底面の比高は13cmあり、南から北に向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒色粘土を主体とし、黒褐色土と植物遺体をわずかに含む上層と、砂を多く含む下層とに細分できる。遺物は出土していない。

その他の遺構（第2・4図）

第33次調査区のVb層上面で発見した4基の柱穴である。掘立柱建物あるいは柱列として組み合うものは確認できなかった。掘り方の平面形は方形や楕円形である。前者の中の最も大きいもので見ると、規模は長辺30~39cm、短辺24~35cm、深さは6~10cmであり、埋土は黒褐色土や砂を含んだ黄褐色土である。柱痕跡は、直径10~20cmの円形であり、埋土は黒褐色土や砂を含む黄褐色土と灰白色火山灰を含むオリーブ褐色土である。遺物は出土していない。



第4図 柱穴断面図

3. まとめ

- (1) 第32次調査区では、柱列跡1条、溝跡1条を発見した。年代については、これらを覆うII-2層に灰白色火山灰の小粒が二次堆積していることから、10世紀前葉以前と考えられる。性格については不明である。
- (2) 第33次調査区では、4基の柱穴を発見した。年代については、埋土内に灰白色火山灰の小粒を含むものと含まないものとがあることから、10世紀前葉前後と考えられる。
- (3) 本調査区の周辺では広範囲にわたって水田跡が確認されており、本調査区から北東へ約40~50m離れた第30・31次調査区においては標高約5mの地点において古墳時代前期の水田層を確認している。32次調査区は標高約3.6m前後、33次調査区では標高約4.0~4.1mまで深掘りしたが、これに相当するものは確認することはできなかった。



第32次調査区全景（東より）



S D1716溝跡（北より）



第33次調査区全景（東より）

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき
書名	多賀城市内の遺跡2
副書名	平成17年度発掘調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第83集
編著者名	石川俊英・武田健市・村松 稔・廣瀬真理子
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134
発行年月日	西暦2006年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市川橋遺跡 (第52次調査)	宮城県多賀城市 城南二丁目13-2	042099	18008	38度 17分 04秒	140度 59分 39秒	20050407 20050419	54m ²	個人住宅建設
市川橋遺跡 (第54次調査)	宮城県多賀城市 城南一丁目3-2・3-3	042099	18008	38度 17分 48秒	140度 59分 22秒	20051107 20051115	22m ²	個人住宅建設
山王遺跡 (第50次調査)	宮城県多賀城市 山王字中山20-4	042099	18013	38度 17分 42秒	140度 58分 44秒	20050405 20050428	112m ²	個人住宅建設
山王遺跡 (第52次調査)	宮城県多賀城市 山王字前田9-1外	042099	18013	38度 17分 39秒	140度 58分 53秒	20050509 20050630	343m ²	道路建設に 係る確認調査
山王遺跡 (第53次調査)	宮城県多賀城市 南宮字町8-1	042099	18013	38度 17分 53秒	140度 58分 22秒	20050510 20050524	32m ²	個人住宅建設
新田遺跡 (第32次調査)	宮城県多賀城市 新田字西2-15	042099	18012	38度 17分 32秒	140度 57分 52秒	20051109 20051128	37m ²	個人住宅建設
新田遺跡 (第33次調査)	宮城県多賀城市 新田字西2-16	042099	18012	38度 17分 32秒	140度 57分 52秒	20051108 20051129	35m ²	個人住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市川橋遺跡 (第52次調査)	集落・都市	古代	東西大路東道路	土師器、須恵器		東西大路東道路を 発見		
市川橋遺跡 (第54次調査)	集落・都市	古代	溝、柱穴	土師器、須恵器 甕型土器				
山王遺跡 (第50次調査)	集落・都市	古代	掘立柱建物、溝、土壤	土師器、須恵器		西9道路の西側に 建物が計画的に配置		
山王遺跡 (第52次調査)	集落・都市	古代	西7南北道路、掘立柱 建物、井戸、溝、土壤	土師器、須恵器		西7道路を発見		
山王遺跡 (第53次調査)	集落・都市							
新田遺跡 (第32次調査)	集落・屋敷	古代	柱列、溝					
新田遺跡 (第33次調査)	集落・屋敷	古代	柱穴					

多賀城市文化財調査報告書第83集

多賀城市内の遺跡2

—平成17年度発掘調査報告書—

平成18年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話 (022)368-1141

印刷 有限会社工陽社
宮城県塩竈市尾島町8番7号
電話 (022)365-1151
